



2025年度 盈進中学校

『修了論文』 優秀作品集



EISHIN GAKUEN
Since 1904

EISHIN GAKUEN

Since 1904



盈進共育

— 仲間と共に、自分で考え、自分で行動する —

2025年度 盈進中学校

『修了論文』『読書感想文』優秀作品集

もくじ

盈進共育の根幹「修了論文」

[盈進中学高等学校校長 西城戸 孝吉]

2025年度『修了論文』

修了論文一覧

《最優秀論文》

「地域・子ども会と私たち」 嶋村 有紗 1

《優秀論文》

「新聞大国 日本の未来」 田口 美空 12

《佳作論文》

「人体におけるかゆみの必要性」 古田 紗衣 24

「猫の高い所からの着地」 井上 結愛 33

《最優秀プレゼンテーション》

「学歴社会の真相」 藤井 新太 39

《フィールドワーク賞》 41

「オニバスが絶滅危惧種に指定された要因とは」 嶋浦 万桜

「好まれぬ食の可能性」 橋本 亜蘭

「バナナの腐敗と熟成のメカニズム」 大下 直輝

2025年度『読書感想文編』 42

《特別校長賞》

「徒然なるままに過ごしてみる」 仁科 祐瑠

《校長賞》

「他者へつなぐ」 中塚 二花

「打倒『やりすぎの自分』」 藤城 拓真

「真実とは」 森藤 咲葵

盈進共育の根幹「修了論文」

盈進中学高等学校校長 西城戸 孝吉

建学の精神「実学の体得」～社会への貢献～に基づく盈進共育「仲間と共に、自分で考え、自分で行動する」は、急激に変化し予測がつかない時代を「共に生きる」ための指針です。これに基づいて、すべての生徒が自分の能力を存分に発揮できる生活と学習の環境を整えること。これが盈進の教職員の使命です。すべての生徒はかけがえのない能力を持ち、生徒は仲間と共に、自らの力によって前進し、高い目標を自らの力でつかみます。

2026年度入学式の式辞の中で、本校が大切にしていることの1つである読書活動について、新入生にむけて次のように呼びかけました。

～「読書」について。社会は急激に変化しています。イランやウクライナの戦争は終息の見通しが立たず、世界の経済は不安定な状況が続いています。これから先に何が起こるかは予測不能です。そんな不安定な時代であるからこそ、新聞を読み、本を読んでください。読書は「自分で考え、自分で行動する」ための多様で豊かな価値観を育んでくれます。中学高校時代に手にした本が、人生の指針となる、または進路選択に大きな影響を与えることもあります。本は必ず、私たちに「どう生きるか」「いかに生きるか」のヒントを授けてくれます。本や新聞は、それらから、何らかの「答え」があるわけではありません。本や新聞は、私たちが日々、充実した毎日を生きるために「自ら考えるヒント」を授けてくれるのです。～

修了論文の取り組みは、「盈進共育」を最も端的に表現する実践です。生徒はそれぞれの興味関心に基づいた「なぜ? (疑問)」と向き合い、仮説を立てて、関連する書籍、情報を探し出し読み込みます。そこから得られた知識を文章化していく活動は、本校独自の「読書科」が中心となって担っていますが、土台となっているのは、すべての教科で積み上げてきた豊かな知識と言語力です。

論文作成の過程においては、指導担当教職員と生徒がともにアイデアを共有し、生徒自らが立てた「なぜ」を明らかにしていく「対話」を、納得がいくまで積み重ねていきます。共に悩み考える活動は、生徒にとっても教職員にとっても知見を広げる貴重な時間でもあるのです。読み、対話を重ねたのちにすすめていく「書く」活動は、かけがえのない生徒の能力を耕し、読解力や思考力を鍛えます。また修了論文の作成において、2019年度から「フィールドワーク」を加えたものとなりました。これは実証の幅を広げ、多角に考える学びにつながりました。専門的知識を持っている方との直接の出会いや手紙等のやりとりは、単にアドバイスをもらい論文の質の高めることにとどまらず、将来の進路選択に大きな影響を与えることにもつながっています。

いま、大学はすべての学習の土台としての「読解力」と「論理的思考力」を求めています。「読むことは知ること、書くことは考えること」(盈進読書科)「書くこと」を中心に据えて、多彩に展開される盈進の修了論文の取り組みは、「盈進共育」の神髄であり根幹です。

2025年度 修了論文 テーマ一覧

効率の良い睡眠
HANIWAの世界
「動物実験の必要性」について
ペンギンと人間の関係
医療的ケア児の現状と未来
筋肉の違いとその利用
お菓子和集中力
はちみつと人体
ゴルフ場と自然破壊の関係
岩絵具と膠
冷凍食品の工夫と開発
スポーツドリンクと熱中症の関係性
バイオメテックスの可能性
知育菓子の可能性
コンビニの無人化へ
フリーゲームとビジネスモデル
Bリーグの復興と課題
日本アニメの絵画輸出
アトピー性皮膚炎と遺伝の関係性
食と睡眠の関係性
ラケットの素材とプレーへの影響
ピッチとストライドの関係性について
かゆみの必要性
動物の感情
映画翻訳
絵本の未来
放射線の危険性と可能性
人と犬のコミュニケーション
震災と避難所のあり方
がん予防と生活習慣の関わり
糖の効果
人工シャトルの開発と進化
音と人との関わりと可能性
手紙の文化とこれから
野球肘にならないために
入浴剤と温泉の疲労回復の違い
ますます元気大作戦
塾の必要性
ラジオの未来
スポーツトレーナーの必要性
聖地巡礼アニメスポット
本はいつから私たちのモノ？
マイクロ波治療のメカニズム
色と心理の関係性
日本の英語教育
霊の存在
高層ビル建設とその安全性
未来まで歌を引き継ぐボーカロイド
インフルエンザの回復と食の関係
意思疎通と五感の関係
オニバスが絶滅危惧種に指定された要因
高齢者とeスポーツ
ディズニー映画と時代背景
シンガポールの観光業
疲労回復シールの効果
パーソナルカラーの効果
VR化して変わるもの
日本に溢れる韓国語を見て
ニッチな電源
マクドナルドの成功
好まれぬ食の可能性
AIの発展とアニメーション
テレビ離れとは
絵本の読み聞かせの必要性
自分らしさは個性と多様性
プラスチックゴミの未来
助産師の未来
洗髪の実験

AI審判の在り方
スパイクとタータン
日本の手話と世界の手話
未利用魚の活用方法
ヘルプマークの認知度と利用率
出生前診断と命の選択
足のおい
大谷翔平になるには
猫の高いところからの着地
ラジオ体操
バッシュについて
ペットの売買
声のひみつ
寿司屋の裏側
冬眠と人の関係
スポーツマッサージ
昔のお守りとしての役割を担っていた人々
犬とのコミュニケーション
自転車の「速さ」の原点
椅子について
過眠症の薬物療法・副作用
筋肉と食
赤ちゃんポストの実態
小学校の先生の仕事が楽になるには
人を襲う動物
グランドハンドリングとAI
敦盛の最期の影響
ダンス必修化
承認欲求と発信者側の依存の関連度の解剖
反射神経のひみつ
建築と町おこし
スポーツテック
新基準バットの正体
教員不足問題
日本語の未来
感情と言葉と行動
伝染性紅斑について
インターネットの普及
日本と韓国の未来
犯罪心理学の活用
社会問題と精神病との関わり方
今を生きる私たちとLGBT
バナナの腐敗
絶対音感の有無
「声」のしくみと可能性
PTSDのメカニズムと記憶、感覚のつながり
飛行機の自動運転化
AI搭載ロボット
ロングセラー絵本が読み継がれる理由
地域・子ども会と私たち
住まいの照明とその発展
辞書の可能性
新聞の未来
多民族国家インドネシアの平和の秘訣
日本の人口減少問題
iPS細胞
数学に関する未解決問題
冷え性と環境
成人食物アレルギーとそのメカニズム
AIイラストとイラストレーターの未来
学歴社会の真相
スマホ依存の原因と克服法
売り方で見えるポケモン
サプリメントと食事の関係性
防災意識の現状と課題
社会的視点から考える怪異の変遷

〔最優秀論文〕 地域・子ども会と私たち

3年D組 嶋村 有紗



〔受賞の感想〕

子ども会での活動で得られた体験やたくさんの人との出会いは今の私にも繋がっており、心強く支えてくれています。このような存在が必要だ、未来へも続いて欲しいと考えた私は、「子ども会と地域コミュニティ」を修了論文のテーマに選びました。

初めて論文を書き、思ったことや考えたことを言葉にする難しさを改めて実感しました。また、1年前までは狭い世界だと思っていた「子ども会」という分野の中でも、さらにたくさんの疑問が見つかり、幅広く奥が深い世界だと分かりました。この1年間さまざまなことを学び、感じながら完成させた修了論文は私にとってかけがえのない経験です。丁寧に、たくさんご指導をいただいた担当の先生には本当に感謝しています。この経験を高校での探究活動に活かし、地域コミュニティのあり方についてこれからも考え続けていきたいです。

目次

〔序 章〕 はじめに

- 第1節 動機
- 第2節 疑問と仮説

〔第1章〕 基本知識

- 第1節 子ども会とは
- 第2節 子ども会の歴史
- 第3節 子ども会の数の推移とその背景

〔第2章〕 子ども会のメリットとデメリット

- 第1節 メリット
- 第2節 デメリット

〔第3章〕 フィールドワークによる学び

- 第1節 子ども会保護者OG
- 第2節 福山市子ども会育成協議会
- 第3節 名古屋市立大学准教授 三浦哲司先生

〔終 章〕 おわりに

参考文献

中国新聞朝刊「ヤングススポット」
二〇二六（令和八）年四月十八日

子ども会 地域での重要性
中学生の時、高校生の時、15歳
でテーマに探究活動をした。町内会や子ども会な
ど、住人同士の関わり合いによって成り立つ組
織がある。私自身、小学生の時に加入していた
子ども会の視点から、そのあり方を考察した。
まず関連本を読み、子ども会の組織数や会員
数は、少子化や新型コロナウイルス禍が原因で
減少している現状を知った。フィールドワーク
では、子ども会役員を体験した方、育成協議会
の方、子ども会の研究をしている大学の先生に
インタビューをした。
そこで、子ども会は防犯・防災の面で役立ち、
家庭・学校・地域をつなぐ重要な組織であるこ
とを知った。存続させるために中高生にできる
ことで、自分の住む地域の活動内容を知る
ことや、自治体や町内会に関する本を読み、理
解を深めるといった大切だと学んだ。
高校生になった今からも探究を続け、地域
のあり方を考えていきたい。

[序 章] はじめに

第1節 動機

地域ぐるみで子どもの成長を支えている子ども会という組織は年々減り続け、ピークだった40年前に比べて3分の1近くまで激減したという。実際私の住んでいる地域にある子ども会は、会員数の減少により約4年前に統合が進み、5つから4つになった。

以前、兄の帰りが遅くなり、両親が近所を探していると、たまたますれ違った人が一緒に探してくれたということがあった。今思い返してみると、それは私たち家族や町内のことをとよく知る人だからこそできたことだと感じる。また、子ども会員だったことでできた思い出や出会えた人がたくさんいるということにも改めて気付かされる。こうした経験を通して、なくなりつつある子ども会という視点から、地域コミュニティのあり方についてこの修了論文で考えてみることにした。

第2節 疑問と仮説

この修了論文で私は「子ども会と地域のコミュニティ」というテーマのもと以下の疑問を持った。それは「なぜ子ども会という組織は減少しているのか。また地域(社会)にどのような影響を与えているのか。」である。この疑問に対して「時代の流れによって個人の自由が尊重され、強制的な空気に抵抗を持つ人が増えたからではないか。さらに子どもの塾や習い事、働く母親の増加が原因の1つではないか。」という仮説を立てた。この仮説の検証と共に、子ども会がなくなることにはどのようなメリット・デメリットがあるのかについても書籍・インターネットならびにフィールドワークを通して明らかにしていきたい。

[第1章] 基本知識

第1節 子ども会とは

「広島県子ども会連合会」と他県の自治体のホームページを見比べると「子ども会」という組織は地域によって呼び名や形式が異なることが分かる。そのため、まず「子ども会」の定義は一定ではないことを確認する。

「全国子ども会連合会HP」によると「子ども会」とは、「乳幼児から高校3年生年齢相当までを構成員とし、地域を基盤とした異年齢の集団」である。また、活動を支える指導者と側面から援助する育成員を含めた総称として用いられている。地域を基盤とし、遊び(活動)を通しての成長と仲間集団のもつ力を統合し心身の成長発達を助長することがその目的だ。

以下に地域によって呼び名や形式の異なる「子ども会」の例を挙げる。概ね担う役割に大差はない。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 単位子ども会…町区(自治会)子ども会。活動を進める上で必要な全機能を持つ独立組織。(2) 地区子ども会…公民館区域の地区における子ども会の集合体のこと。(3) ジュニア・リーダー…中高生(同年齢相当の者)による子ども会のサポーター。市子連によって組織され、地区・単位子ども会に派遣される。また独自の指導的役割を持つ。 |
|--|

第2節 子ども会の歴史

前節において「子ども会」の定義や呼び名は明らかになった。ただし呼び名にとらわれることなく遡ればこうした組織は徳川時代における、会津や薩摩などの地域にあった、「遊びの仕(とも)」や郷中教育という教育制度にまで拡大解釈することができる。また、庶民を対象とした寺子屋も子ども会の源流と

して考えられている。

しかし、今日の子どもの会の大半は昭和20年の終戦を境にした価値観の変動、物質的窮乏の中で生まれたといわれている。そこで子ども会の歴史を年代順に書き起こしていくことにする。

昭和20年8月	終戦
21年10月	文部省が各地方長官へ「青少年不良化防止対策要綱」を通達。 青少年の不良化を問題視し「地域において実施すべき施設(事業の意)」を示す。 社会教育局長が「児童愛護班結成活動に関する通知」を出す。
22年3月	「父母と教師の会-PTA」の設立を呼びかけ、学校外での活動を通して個性を伸ばすことを勧奨する。
22年12月	「児童福祉法」交付。 地域における児童福祉施設の設置が促される。
23年11月	厚生省児童局が「児童指導班結成及び運営要綱」を作成。
26年	全国社会福祉協議会結成。 「子どもレクリエーション・キャンプ指導者講習会」が行われる。
27年	呼び名が「グループワーク講習会」となる。
30年～36年	呼び名が「児童集団指導者講習会」となる。
38年	「少年生活指導者研究会」開催。 「全国少年団体指導者連絡協議会」を結成。
39年4月	「全国子ども会連合会」に改称。
40年	「少年生活指導者研究会」が「子ども会等少年団体指導者育成委員事業」となる。
43年9月	定款を改定し全国の子ども会関係者の総意に基づく組織として、指定都市の子ども会連合会組織の代表者を社員とする「社会法人全国子ども会連合会」として再出発する。
43年～45年	「子ども会等少年団体指導者育成委員事業」が「子ども会等少年団体育成研究協議会」となる。

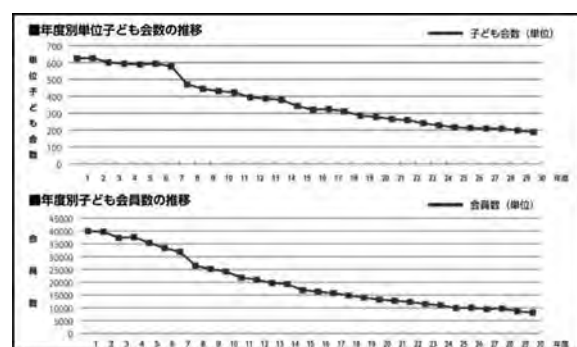
以上のことから戦後は青少年の不良化防止や個性の伸長を目的として制度が整えられてきたことが分かる。これは現在の子どもの会の目的と比較すると、これからの未来を見据えたものというよりは、戦後の子どもに関する問題解決を重視しているものであると言える。

第3節 子ども会の数の推移とその背景

前節で子ども会の役割と歴史を確認した。本節では数の推移とその背景を考察する。

グラフ①は子ども会数および会員数の推移を表したものである。単位子ども会の組織数も子どもの会員数もずっと減り続けていることがわかる。

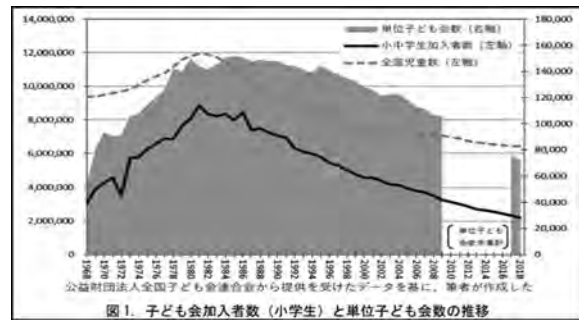
(参照:公益社団法人全国子ども会連合会 子ども会数および会員数の推移
https://www.kodomokai.or.jp/kobe/wpcontent/uploads/sites/11/2019/10/ajisai2_compressed.pdf)



グラフ①

次に、グラフ②は子ども会の発展と衰退をより詳しく表したものである。

(参照:国立大学法人 山口大学 子ども会の〈危機〉はどこから来るのか？
-社会的ジレンマにおけるフリーライダー問題としんがり問題 高橋征仁
<https://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/29946/files/167946>)



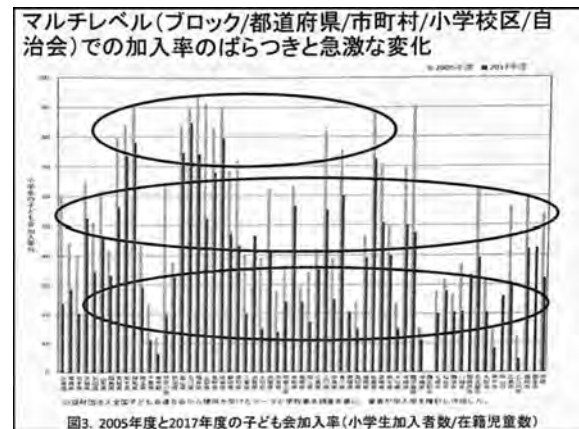
グラフ②

ここからわかることは以下の4つである。

- ①子ども会は戦後の組織として1970年代に急成長、1986年団塊ジュニア世代でピークを迎えた。
- ②1990年代以降参加者が減少しているが、全国児童数も同じように減少しているこのことから参加者減少の理由は少子化ではないかと考えられる。
- ③2000年以降、児童の減少はやや収まるが子ども会の会員数の減少はさらに加速している。
- ④会員数や児童数の減少に比べると、単位子ども会数の減少はやや緩やかである。つまり会員数が少なくても子ども会の存続をしているケースが多かったということが分かる。

グラフ③は2005年度と2017年度の子ども会加入率を都道府県ごとに表したものである。中部地域や北関東地域、南九州など子ども会活動が活発な地域に対し、都市部や東京都、千葉県などは元々加入率が低い。また都市部でない沖縄県や愛媛県、高知県、北九州市などの地域も元々加入率が低く、組織化がうまくいかなかったところもあるようだ。京都府は組織化されていない状態でリストにも載っていない。

全体を見ると、2005年度から2017年度にかけて加入率はだいたい20%、場合によっては40%減少しており、加入率の変化も都道府県によって異なっている。



グラフ③

(参照:コミュニティ制作学会 監修 コミュニティ制作学会中部支部 編著『子ども会と地域コミュニティの関係を考える』)

ここで2005年度と2017年度を比較し、加入率ごとに大まかに地域を分け、変化の様子を整理する。

表を見ると子ども会の加入率が高い方で安定している場合と、低い方で安定している場合の二極分化していることがわかる。このことから初期値の違いによるものではなく、高次の地点(70%)と逆に約20%といった低次の地点というように落ち着きやすい地点が存在するのではないか、と考察できる。

元々(2005年度)の加入率	維持している(2017年度)の加入率
約90%	約70%
約60~70%	約30~40%
約20~30%	約10~20%

こうした状況の原因として考えられているものを以下に記す。いずれも山口県の事案である。

(1)カスケード効果

「連鎖的に人の動きが反応する、雪なだれ式に変化する」効果を指す。山口県では、山口市全体の加入率は約50%だが隣の防府市の加入率はほとんど100%である。都道府県だけでなく、市区町村でも子ども会の捉え方は異なるようだ。では山口市と隣の防府市の違いは何なのか、加入率の高い子ども会の役員さんによると、基本勧誘に行く際に「ほぼみんなが入っています」「ここは全員加入です」と声をかけるそうだ。人は周囲の動向を敏感に察知する準統計的な能力を持ってお

り、各人それぞれの閾値により、「これくらいの人が入っているなら自分も入ろう」という連鎖的な人の動きがある。

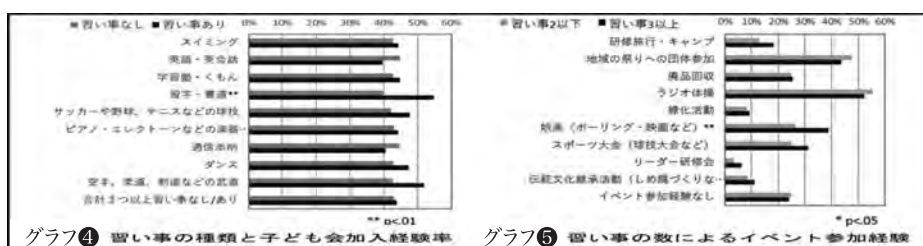
(2)旧の商店街の衰退

地域特性としての影響力が大きい「昔からの商店街が近くて、自営業を営んでいる家が多い地域」がある。このような地域ではある程度の人数の子どものおと、地元商店街が中心となって子ども会のイベントをしていたが、現在子ども会が維持できず未加入者が増えている。旧商店街が衰退し、お祭りやイベントが無くなったことが背景にあると考えられる。

(3)新型コロナウイルス

2020年に国内で初めて確認された新型コロナウイルスの影響で約3年間、夏に団地の公園で行う盆踊りや、本の読み聞かせをはじめとする子どものためのイベントがなくなった。このような状況がコロナ禍が収まった今にも、子どもの関わる活動に影響を与えているのではないかと考えられる。

私はこれらのことを知るまで、子ども会加入率低下の原因に、個人の自由が尊重され強制的な空気に抵抗を持つ人が増えたことが含まれていると考えていたが、必ずしもそうではなかった。さらに子どもの塾や習い事・働く母親の増加が原因の1つではないかと考え、以下の2つデータを用いて考察した。



(参照:子ども会の〈危機〉はどこから来るのか?—社会的ジレンマにおけるフリーライダー問題としんがり問題 高橋征仁

<https://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/29946/files/167946>)

*山口大学教授の高橋征仁さんがWebアンケートを用いて集めたデータのうち、「子ども会と私生活論」に関する質問の結果をまとめたもの。

(1)「子どもの習い事と子ども会活動の関連」

①習い事の経験率の平均

子どもは2.37個、母親の子ども時代は2.21個、と増減はさほど大きくないことが分かる。

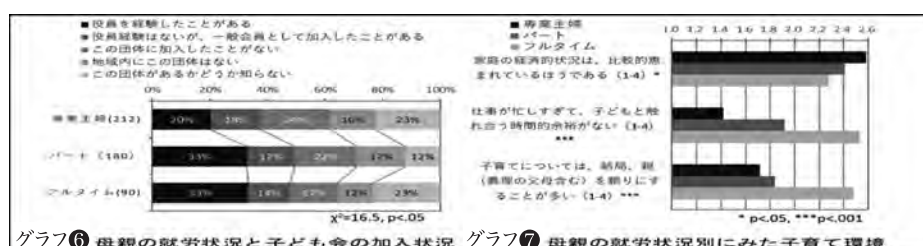
②習い事の種類と子ども会加入経験率

習字・書道や柔剣道では、子ども会の加入・非加入で有意な差がみられた。これらの習い事は地域に密着したものであるもので、習い事をしている方が参加率・加入率は高い。逆に英会話や通信添削などの、優秀ゆえに地域を飛び出していく、いわゆる「ブライトフライン」の習い事では統計的に有意な差はみられなかった。

③習い事の数によるイベント参加経験率

習い事の数が多い方が、研修旅行・キャンプ、ボーリング・映画などの娯楽の参加経験も多いというかたちになっている。そのほか、統計的に有意な差がみられる内容はなかった。

ここからは習い事の種類や数が子ども会活動に参加しない理由になるようなことは読み取れない。



(参照:国立大学法人 山口大学 子ども会の〈危機〉はどこから来るのか?—社会的ジレンマにおけるフリーライダー問題としんがり問題 高橋征仁

<https://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/29946/files/167946>)

(2)「母親の就労状況と子ども会活動の関連」

①母親の就労状況と子ども会の加入状況

グラフ⑥は専業主婦、パート、フルタイム、の3つに分類しそれぞれの子ども会の加入状況を示したものである。加入率も活動規模も：パート＞フルタイム＞専業主婦、と並んでいる。

②母親の就労状況別にみた子育て環境

グラフ⑦から子どもと実際に触れ合う時間的余裕がないのは働いている時間に比例していると分かる。また非正規雇用のパートの母親は家のことにも子ども会活動にも熱心であることが分かる。反対に専業主婦は、子ども会の役員にあまり積極的ではない。これには、市内居住歴が短く、親族も少ない上に内向的で地域が仮の住居であるため参加意欲が抑制されているのではないか。また「自分の子どもに子育てというかたちで投資するために、専業主婦という道をあえて選んだ。自己選択が地域活動によって横領されることに対して、非常に警戒心が強い。」と『子ども会と地域コミュニティの関係を考える』に書かれている。

これらのことから私が立てた「子どもの塾や習い事、働く母親の増加が原因の1つではないか。」という仮説は間違っていることが分かった。

では次章より、私の論文の中心となる「子ども会の減少」のメリットとデメリットについて述べる。

〔第2章〕子ども会のメリットとデメリット

本章では子ども会が存在するメリットとデメリットについて考える。前節で子ども会加入率や加入者数は減少していることが分かったが、子ども会にメリットが多くあることが明らかになればこの現状を変えることができるのではないかと思う。

第1節 メリット

第1項 『日本における「子ども会」の現状と新しい時代に向けてのあり方に関する－考察』より

前章から、子ども会の加入率は都道府県ごと、市区町村ごとで大きな違いがあることが分かった。ここで*『日本における「子ども会」の現状と新しい時代に向けてのあり方に関する－考察 II教育実践現場における「子ども会」』を使ってG市の考える子ども会のメリットを、具体例をあげて整理する。

*小学校教員や育成会役員の経験がある時田詠子さんがA～D小とT地区の実践についてまとめている。

①A小…育成会主催の『村上毛かるた大会』に備え、「校内上毛かるた大会」を実施。

群馬県HP（文化振興課）によると『上毛かるた』は日本が敗戦した翌々年の昭和22年12月、衣食が不十分で荒れ果てた環境の中誕生した。「暗くすさんだ世の中で育つ子達に明るく楽しく、希望をもてるものを与えたい。」という想いをかたちにした、県内の自然や温泉、歴史上の人物や地域の産業など、群馬県の特徴が学べ郷土愛を育むものである。現在でも毎年、県内の各地域で大会が開かれている。（参照：『「上毛かるた」で見つける群馬のすがた<https://jomo-karuta.pref.gunma.jp/>』、『群馬県HP（文化振興課）<https://www.pref.gunma.jp/page/3793.html>』）

想いの込められた郷土かるたを毎年行事として行うことで地域の文化の継承につながる。

②B小…6年児童代表が司会・黒板書記を務める『夏休み子ども会計画』を実施。1～6年生の児童20数名が参加した。児童主導で立案され、育成会役員と担当教員が見守る立場をとったことで異学年交流につながった。

③C小…始業式・終業式に集団下校を実施。集団下校とは「下校時校庭に子ども会区単位で整列、安全主任の諸注意の後、子ども会区担当教員が、およそ各児童の家まで送り届けるというもの」。

辻々には育成会役員が待機して子どもを出迎える。学校と地域育成会が連携して通学路の危険箇所等確認することができた。教職員の地域理解や子ども理解につながると言える。

④D小…1学期終業式の後、学校にて1泊2日の育成会主催キャンプを実施。児童・育成会役員・教職員

が参加し、夕食作り、理科主任による星座教室や区長による野鳥観察教室などを行う。また、育成会上毛かるた練習、『町子ども会上毛かるた大会』に参加。育成会行事として、日曜学習参観日に学校内で、放課後に近隣の郷土資料館で上毛かるた練習を実施。育成会役員が主導したが、教職員も必要に応じて支援した。『町子ども会上毛かるた大会』に児童全員が参加、育成会役員、保護者、学校長、教頭、教諭らもそれぞれ審判・引率・応援として参加した。子ども会や地域行事に学校が協力することで、学校から校庭の老木処理、運動会の実施、大雪の除雪等を家庭や地域社会にお願いしやすくなった。学校・家庭・地域の連携である。

- ⑤T地区…地区の3大行事「春の写生大会」「夏の球技大会」「冬の上毛かるた大会」や、廃品回収、朝のラジオ体操、一里塚の草刈り、町民運動会などの経験を通し自己の地域（児童と保護者、商店街、区長及び諸団体）を知り、いざという時の協力依頼をする素地ができた。

G県T地区の実践から読み取れることをまとめると、昔からある地域ならではのものを継承し続け郷土愛を育める、異学年交流ができる、学校が地域理解・子ども理解を深め、学校・家庭・地域社会が連携し地域の活性化につながる、など子ども会には多くのメリットがあるということが分かった。

第2項 福山市の具体例より

次に私が暮らす福山市では子ども会がどのような活動をしており、どのような効果があるとされているのか。『福山市子ども会50周年記念誌』には、10ブロックの紹介が書かれている。ここから分かったことは、どのブロックも共通して親善球技大会を実施しているということだ。この効果は「子ども同士の交流を通して何かを達成するという楽しさや大切さを学ぶ」ことである。

さらに細かく分けて学区ごとに見てみると、その地域ならではのとんど祭り、神楽、はね踊りや古紙回収、ふれあい祭り、映画鑑賞やりんご狩りなど、さまざまな行事が行われていた。これらを通じて伝統的な文化・芸能の継承、地域とのふれあい、子ども同士の交流などが行われていることが分かった。

以上をまとめると以下のようなメリットがあることが分かる。

- ・地域との「ふれあい」により郷土愛を育める
- ・さまざまな年代の異年齢交流
- ・伝統的な文化・芸能の継承
- ・通学路の危険箇所等の確認・教職員の地域理解と子ども理解
- ・自己の地域を知ることによって校庭の老木処理、運動会の実施、大雪の除雪等を学校・家庭・地域が連携して行うことやいざという時の協力依頼ができ、地域の活性化につながる

第2節 デメリット

『日本における「子ども会」の現状と新しい時代に向けてのあり方に関する一考察 III子ども会の可能性』では東京福祉大学専任講師の関容子さんが子ども会の否定的な側面を挙げている。以下箇条書きで示す。

- ・忙しくなった現在の子どものそれぞれの関心や活動の幅が、子ども会活動に合わないため、子どもたちを子ども会活動に参加させる意義や必要性が感じられない。
- ・育成会役員に対する負担感
子ども時代の子どもの会活動の記憶が肯定的なのに対し、育成者という役員としての親の働きを見ていた頃の記憶は否定的なものだという。育成会役員は行事の手配や資料の作成などの仕事があり、それらの役割に対する面倒くさいという思い、子ども会の行事等のために仕事の調整をすることの

難しさや負担感が大きく、「やりがい」転嫁しない。

・地域の人間関係に対する煩わしさ

それぞれが自身の生活スタイルに重きをおき、特定の気の合う世帯との付き合いを重視するため、地域の煩わしい人間関係を避ける傾向がある。地域でのコミュニティ関係の希薄化によって人間関係に対する煩わしさが生まれている。それが育成者の負担感へとつながっているのではないか。

〔第3章〕フィールドワークによる学び

前節において子ども会のメリットは地域・学校・家庭それぞれにあり、デメリットは育成会役員を務める保護者にとってのものがほとんどで、子ども会という組織が減少している原因につながっている可能性が高いということが分かった。

これまでのことから子ども会の現状や問題が明らかになったので、未来に焦点を当てさらに学びを深めるために、3つの立場の方にそれぞれインタビューをおこなった。以下に質問への返事をまとめる。

(1)早川さん 子ども会保護者OG(T子ども会が解散となった年の会長職)

メールでアポイントメントを取り、直接インタビューをした。

(2)福山市子ども会育成協議会

学びの館ローズコムにある事務局を訪ね直接インタビューをした。

(3)名古屋市立大学 人間文化研究科 都市政策コース 准教授 三浦哲司先生

手紙を書き、ZOOMでインタビューをした。

(1)子ども会保護者OG

【質問1】 T子ども会は何故解散になったのか。

【回答1】 親御さんたちが役員をやりがらない・他人の世話をすることがストレスにつながる・コミュニケーション能力が低下し、誰とでも活動できる雰囲気ではなくなり意見のぶつかり合いが起こる・意見をまとめるために時間をかけると休みがなくなる・共働きのため、子ども会の行事へ子どもと参加できない・平日は仕事、週末は子ども会の行事となり家族との時間が減り予定が立てにくくなる。これらのことが連鎖して、活動がしにくくなり解散につながった。

【質問2】 解散を決めた時にどんな話し合いがされたのか、またどんな問題点があったのか。

【回答2】 残りの運営費の行方…残りの行事で使う以外のものは、一部を町内会へ返却・子ども会本部に報告・その他の子ども会やソフト・フットボールチームに寄付。

子ども会復活のための手続き…今後T子ども会復活となったときに子ども会本部に相談・町内会へ報告をする。T子ども会のそれまでの道筋を次世代の人たちへ残す必要がある。
町内行事の参加について…地域に住んでいる子どもが町内行事にどのように参加するのかという問題点がある。子ども会に未加入でも参加できる行事をつくるなど対策が必要である。

【質問3】 子ども会は今後どのようなあり方をすべきか。

【回答3】 継続するためには役員の負担を減らすこと、たくさんの子どもの参加したいと思えるような行事にすることが必要。

例) ①学区全体で一つの子ども会にする…役割を分担することで一人ひとりの作業が少なくなる。

②期間を決める…活動をする期間をまるまる一年間にするのではなく、夏休みや冬休みに限定したり、期間ごとに担当役員を細かく交代するなど、一人の役員が担当する期間を縮小し負担を減らすことができる。

③学校では教えてくれないこと・習い事のように身につくことを中心とした行事をつくる…

例えば、保護者や地域の方々の身近な得意分野を学べる教室を開く

(算数・英語・ピアノ・DIYなど)

(2) 福山市子ども会育成協議会

【質問1】 福山市子ども会の現状とは。

【回答1】 現在の子どもの会の組織数は右図。

全85学区の内45学区。

単位子ども会276団体(登録上)。

幼児会員	185
小学生会員	6,293
中学生会員	72
高校生・高校生相当年齢会員	16
育成者・指導者会員	3,538
合計	10,104

【質問2】 子ども会が減少することによるデメリットは何か。

【回答2】 人とのつながりがなくなる…地域でのつながりがなくなるとお互いのことを知らないため例えば犯罪などが起こったときに容疑者がどこの誰でどんな人なのかが分からない。

経験が減る…人や地域のつながりの中でしか経験できないことがあるが、子ども会がなくなれば、これらの経験が子ども時代から欠落することになる。例えば幼い子との接し方や高齢の方々との交流がなくなる。幼児から年配の方まで幅広い年齢層が存在する地域では、いろいろな立場や視点からものごとを考えることができる。

【質問3】 子ども会のメリットは何か。

【回答3】 一部質問2の回答を裏返したものになる。

- ・人とのつながりができ、考え方や視点、したいことなど、人から受ける良い刺激が増える。
- ・学校と家の往復ではなく、子ども会という子どもの居場所になる。
- ・保護者にとっては同じ子ども会やソフト・フットボールチームの子ども達はみんなの子どもと捉えることができる。つまり育ち合いができる。
- ・祭りなどの行事を通して自分の暮らす町や地域に愛着がわいてくる。

【質問4】 子ども会は今後どのようなあり方をすべきか。

【回答4】 子ども会は継続するべきである。活動するのは子どもであり、上の子は下の子に教え、下の子は上の子に学ぶという年齢層を大切にすべきである。課題としては、小学校以降のつながりが薄いことである。現在、中高一貫の学校やクラブチームはあるが、小学校とは溝ができてしまっている。

(3) 名古屋市立大学 三浦哲司先生

【質問1】 子ども会はどのような存在か、また子ども会が存在することによるメリットは何か。

【回答1】 まず誰にとってのメリットなのか、どういう立場からのメリットなのかを整理する必要がある。アジア・オセアニア地域、中国・東海地域という大きなものなのか、あるいは小学校区地域という身近なものなのか、など地域をどのような単位で捉えるのかについて考えるべきである。今回は子どもたちが集まって活動する身近な地域と捉えさまざまな立場からのメリットを出す。

- ・自治会町内会の関係者…子ども会として活動していると、自分たちの地域に住む子どもの特徴(どのような属性・人数でどのような活動をしているのか)を目に見える形で把握できる。
- ・保護者…子ども会を支える育成者役員の特徴を存在として把握できる。
- ・育成会役員…将来的な自治体町内会の支え手になってもらいたい人を把握できる。

※子育てや仕事で忙しく、役員はやりたくないと思っている保護者にとってはデメリットになる。

【質問2】 子ども会は今後どのようなあり方をすべきか。

【回答2】 地域によって子どもの人数など事情がさまざまなため、一概に言うのは難しく、それぞれの地域で模索することが現実的。例えば、小さなエリアで活動している子ども会はスケールを広げるなど、人数が少なくても子ども会の活動を続けるための工夫ができる。今では自治体町内会の中で支えてくれる人が少なくなっているため、町内会単位から小学校区単位での活動にする方法もある。※人口230万都市名古屋でも、町内会単位の維持が難化し、小学校区単位で活動している。

【質問3】 今後、地域コミュニティを存続するために私たち中高生ができることは。

【回答3】 地域コミュニティというものを自治体町内会という単位で捉えると、以下のことができる。

- ① 住んでいる地域の自治体町内会が何をしているのかを調べる

…夏祭りや盆踊り大会、清掃活動など行事や活動内容を知る。

② 同世代である中学生高校生がどのような形で地域と関わっているのかを知る

…国内には、町内会長をしている高校生がいる。

③ 自治体町内会に関する簡単な本を読んで理解を深める

…自治体町内会の良いところ、そうでないところも把握する。

④ 福山市で開催される地域コミュニティに関するワークショップや講演会に足を運んだり市役所に話を聞きに行ったりする。

3つの立場の方に取材をした結果、これから未来を生きていく子どもたちにとって子ども会が存在するメリットは多く、やはり子ども会は今後も存続していくべきだという私の思いは強くなった。しかし子ども会役員の役割は思っていた何倍も多く、子ども会を存続するにも解散するにもたくさんの手間がかかることも分かった。つまり保護者や役員を担う人にとってのメリットは少ないと感じた。子ども会は地域の特性や事情に応じてこのような課題を改善する必要があると分かった。

またこれらのインタビュー以外にも報道から子ども会以外に、「子ども食堂」といった地域との関わりを持ち、防災などの役割をもつ組織があると知った。フィールドワークを通じて、改めて子ども会の重要性和今後の課題が浮き彫りになった。

〔終章〕 おわりに

小学生の頃に子ども会に加入していたことで多くの経験や出会いがあった。私立の中学校に通っている今でも、家に帰るとその頃の関係に心強さを感じる。しかし、最近のニュースで「地域離れ」という言葉をよく耳にする。実際、私の家の周りでも、田んぼがアパートやマンションに建てかわり、顔も名前も知らない人たちをよく見かけるようになった。だから今回論文を執筆するにあたり、希薄化する地域コミュニティのあり方を特に身近な「子ども会」という視点から考えようと思った。「なぜ子ども会は減少しているのか。また地域（社会）にどのような影響を与えているのか。」という疑問に対し、「時代の流れによって個人の自由が尊重され、強制的な空気に抵抗を持つ人が増えたからではないか。さらに子どもの塾や習い事、働く母親の増加が子ども会減少の原因の1つではないか。」という仮説を立てた。

第1章では子ども会の定義、歴史、子ども会の数の推移とその背景について、インターネットや本を用いて調べた。子ども会の定義は地域によってさまざまで、時代に合わせて目的を変化させてきたこと、習い事や両親の共働きではなく、地域の状況や新型コロナウイルスの流行による社会の変化などが減少の原因であることが明らかになった。このことから私の仮説は間違っていたと言える。

第2章では子ども会のメリットとデメリットについて、子ども会を研究する人たちによって書かれた論文を用いて考察した。メリットは子ども・家庭・学校・地域という立場それぞれに存在し、デメリットは子ども自身にとってではなく育成会役員にとって多く存在すると分かった。

第3章では、子ども会の未来に焦点を当てて考えようと、子ども会保護者OGの方と福山市子ども会育成協議会、そして名古屋市立大学三浦哲司先生にインタビューを行った。子ども会役員の役割や仕事、子ども会の現状、メリットとデメリット、そして今後の子ども会のあり方に対する考えを、身近な地域、市、全国という3つの視点から詳しく知ることができた。突然であったにも関わらず、丁寧に対応してくださり本当にありがたかった。

テーマに合う本がなかなか見つからず、先の見えない不安な状態だったが、論文指導担当の先生、子ども会保護者OGの早川さん、福山市子ども会育成協議会の方々、三浦哲司先生を始めとする多くの方々のご協力で書き上げることができた。特に三浦哲司先生には福山市立大学に福山の地域コミュニティの研究をしている教授がいることを紹介して頂いた。論文執筆を始めたころは、子ども会について学術的に調べる手段はあまりないと思っていたが少し視野を広げれば身近なところにたくさんあると分かった。

子ども会は、子ども・家庭・学校・地域をつなぎ、地域の活性化や防災・防犯の面でも役に立ち、地域コミュニティを存続するための重要な組織である。既に廃止となった地域もあるが、今後それぞれの地域や事情に合わせた方法で、課題を改善し存続していくべきだ。これからも私自身の成長を支えてもらった地域のあり方を、未来を生きる中高生として考え続けたい。

参考文献

〔書籍〕

- ①コミュニティ制作学会 監修 コミュニティ制作学会中部支部 編著
『子ども会と地域コミュニティの関係を考える』(2024年 東信堂)
- ②三浦哲司『子ども会と地方自治―地域の挑戦、行政の支援』(2025年 明石書店)
- ③福山市子ども会育成協議会 創立50周年記念行事 実行委員会
『福山市子ども会50周年記念誌』(2007年)

〔インターネット〕

- ①「公益社団法人 全国子ども会連合会」<https://www.kodomo-kai.or.jp/>
- ②「一般社団法人 広島県子ども会連合会」<http://hiroshima-kenkoren.jp/org/>
- ③「福山市子ども会育成協議会」<https://fukuyamashikodomo.o.oo7.jp/index.html>
- ④「米子市」<https://www.city.yonago.lg.jp/5589.htm>
- ⑤「公益社団法人 全国子ども会連合会 子ども会数および数の推移」
https://www.kodomokai.or.jp/kobe/wpcontent/uploads/sites/11/2019/10/ajisai2_compressed.pdf
- ⑥「「上毛かるた」で見つける群馬のすがた」<https://jomo-karuta.pref.gunma.jp/>
- ⑦『群馬県ホームページ(文化振興課)』<https://www.pref.gunma.jp/page/3793.html>

〔論文〕

- ①「やまぐち地域社会研究19巻 子ども会の〈危機〉はどこから来るのか？
―社会的ジレンマにおけるフリーライダー問題としんがり問題 高橋征仁 2023年」
- ②「環境と経営 第26巻2号 日本における「子ども会」の現状と新しい時代に向けてのあり方に
関する一考察 静岡産業大学論集 2020年」

[優秀論文] 新聞大国 日本の未来

3年D組 田口 美空



[受賞の感想]

私が「新聞の未来」というテーマのもと論文を書いたのは「メディア」に興味を持ったことがきっかけでした。1つのことを長く続けることも文章を書くことも苦手だった私は、本当に書き上げることができたのか不安を抱えつつのスタートでした。

論文を書き始めてからはどのように短くまとめれば良いのか、その中にどうすれば必要な情報を入れ込めるかなどの悩みと直面しました。またフィールドワークは初対面の人と話すことが苦手な私にとっては大きな挑戦でした。様々なことと向き合い挑戦した経験は私にとって大きな財産となりました。

1年間かけて論文を書き上げることは簡単なことばかりではなかったけれど、先生の多大なるサポートを頂き、書き上げることができました。物事の過去・現在・未来を知り、考え、繋いでいくことの大切さを知ることができたこの探究活動を未来に生かしていきたいと思います。

目次

[序 章] はじめに

- 第1節 動機
- 第2節 疑問と仮説

[第1章] 基本知識

- 第1節 新聞とは
- 第2節 新聞の歴史

[第2章] 新聞のおかれた現状

- 第1節 新聞大国日本
- 第2節 新聞の発行部数の推移
- 第3節 なぜ新聞が必要とされなくなったか

[第3章] 新聞の未来

- 第1節 新聞信頼度
- 第2節 地方新聞の未来

[第4章] フィールドワーク

- 第1節 フィールドワークの概要
- 第2節 フィールドワークの結果

[終 章] おわりに

参考文献

中国新聞朝刊「ヤングスポート」
二〇二六（令和八）年三月二十八日

新聞の未来探究し論文に
中学生 田口 美空 15歳
中学校の3年間、さまざまな探究活動を行った。その集大成として「新聞の未来」について考える「修了論文」を執筆した。
まず、発行部数減少の原因を探るため、本やインターネットで調べた。主な原因として挙げられるのはインターネットの普及だが、他にも読み手の読解力の低下や、新聞が紙であるためという理由もあると明らかになった。
そして、関西地方の大学の教授にインタビューを行った。ネット普及以外の理由として配達における人手不足や、記事に対する興味が人それぞれであることも原因だとおっしゃった。
新聞はデジタル化が進んでいる。今後身近で手軽なものに進化していくことが予想される。情報は私たちの生活にとって必要不可欠なものだ。オールドメディアと呼ばれる新聞への信頼度は依然として高いと思う。メディアの本質を未来に残すには何ができるのか考え続けた。
(福山市)

[序 章] はじめに

第1節 動機

現在、新聞紙の発行部数が大幅に減少してきている。毎日の正確な情報を知るための手段として必要とされてきた新聞というメディアが日常生活において不必要なものという認識に変化している。確かに私が幼い頃は私の家でも新聞を購読していた。しかし現在は新聞を手にとることすらなく学校の授業でたまに扱うぐらいだ。また、コンビニエンスストアで販売されている新聞の数も年々減少してきていると感じる。私は新聞紙の発行部数の減少には現代社会における情報に対する人々の考え方が大きく変化したことが関係しているのではないかと考えた。

以上のことから、情報を伝達するメディア「新聞」の現在と未来について追究しようと考えた。

第2節 疑問と仮説

この修了論文で私は「新聞の未来」というテーマのもと以下の疑問を持った。それは、「なぜ新聞は必要とされなくなったのか」という疑問である。この疑問に対して「インターネットの急速な普及が関係しているのではないか」という仮説を立てた。テレビの普及やインターネットを活用したスマホの誕生がメディアの変化に大きく影響しているのではないかと考えたからだ。そこでこれから書籍・インターネット、ならびにフィールドワークを通して明らかにしていきたい。

[第1章] 基本知識

第1節 新聞とは

『ポプラディア』によると「新聞紙」とは「出来事の事実や解説などを一般読者に伝える定期刊行物」である。様々な出来事について正確な情報を多くの人に提供するマスメディアの1つであり、一般的には社会全体に関する報道や論評、娯楽などの幅広い分野を扱うものを指す。本来は民主主義の土台である正確で公正な報道を行い、自由な評論の場をつくって、多くの人の声を反映した世論を形づくるのが新聞の役割である。しかし報道の自由は公権力やその他の圧力によって妨げられる危険をはらんでいるため、新聞の発行者が常に公正な立場を守る必要がある。また、情報を受け取る側にも与えられた情報を全て鵜呑みにせず自身で内容をよく考える必要もある。

新聞には社会で起こった出来事全体を扱うものに加えて、経済やスポーツなど特定分野を専門に扱うもの、日刊のほか週刊や月刊といった一定の期間で刊行されるものなど様々な種類がある。また日本全国に普及している全国紙とある一定地域にのみ配布している地方紙がある。全国紙は「5大新聞」とも呼ばれる朝日、毎日、読売、日本経済、産経の5紙を指し、国内の新聞発行部数の約半数を占める。地方紙にはブロック紙、県紙、第二県紙、地域紙がある。広島県にも地方紙の1つとして中国新聞がある。

第2節 新聞の歴史

前節において「新聞」とはどのようなものなのか、またどのような役割があるのか明らかになった。では新聞というメディアはどのようにして現在のスタイルになったのだろうか。ここでは『メディアの歴史から未来を読む』をもとに、日本における新聞の歴史を紐解いていく。

ドイツやイタリアなどで、印刷された定期刊行物の新聞があらわれた17世紀のはじめ頃、日本では瓦版が存在していた。日本において新聞という名の付くものは1862年の「官板バタビヤ新聞」が最初であるが、1870年に創刊された横浜毎日新聞が日刊新聞の始まりとされる。その前年に東京と横浜の間に電信線が開通し、遠隔地の情報を即時に収集することができる電信網、刷り上がった新聞を短時間で遠

くまで配送するための鉄道網の整備が実現したことで、新聞は大規模な流通を可能とし、読者は広範囲に拡大した。すなわち日本において新聞の発達には電信や鉄道の普及と分かち難く結びついていたのだ。

さてその内容は、商況などの経済記事や商店の広告などがほとんどで、事実報道に重点が置かれるまでは政治の論説が中心の「大新聞」と、娯楽が中心の「小新聞」とに分けて販売されていた。その後自由民権運動の衰退に伴い、大新聞も報道を重視した平易な文章で書かれるようになっていき、小新聞も論説や政治報道を取り入れ、中新聞化が進み、両者の垣根はなくなっていった。こうして急速に発行部数を伸ばした日刊新聞によって、多くの人々が一斉に同じ情報に接するという状況が初めて生まれたのである。

戦争の時代、新聞は言論統制を受け戦時体制に組み込まれていった。常に検閲下に置かれた新聞は、報道の自由が奪われ、事実が全く書けない状況に陥っていたという。実際検閲制度により負け戦を国民に伝えないための仕組みや軍事情報の漏えい防止などの対策が行われていた。また、それまでは各都道府県に複数あった新聞社は県庁所在地を拠点とする新聞社のもとに統合されていく。ここには戦時下の資源不足に伴う用紙統制という建前のもと言論を効率よく統制したいという政府の本音が隠されていた。

このような歴史的経緯からも、現在の日本では正確で公正な報道が常に求められるようになった。明治8年から明治42年までは新聞紙条例、それが改正・強化され第二次世界大戦終戦までは新聞法が新聞を取り締まってきた。現在は名称のついた新聞の法律は存在していない。

終戦直後、占領軍司令部が新聞に対する政府の統制を矢継ぎ早に解除したことにより、新聞の発行が自由となった。全国各地で復刊計画が続出し昭和20年10月から21年1月までの3ヶ月で90の新聞が市場に現れた。しかし戦争の打撃によって新聞用紙の国内生産は激減しページ数は2～4ページだった。昭和30年には1日平均朝夕刊合わせて約14ページまで回復し発行部数は約2倍になった。昭和時代から平成時代初期にかけて発行部数は増え続け、発行部数のピークである1997年には5377万部を突破した。また、ページ数も約40ページまで増加した。ただし当時の言論統制によってできた県ごとに有力紙が一紙あるという大勢は変わらないまま現在に至っている。

[第2章] 新聞のおかれた現状

第1節 新聞大国日本

前章では「新聞」の定義やその歴史についてまとめた。そこでいよいよこの第2章では本論文における私の疑問である新聞が必要視されなくなった理由と背景を明らかにしたい。

日本における新聞の動向を考える前にまず世界全体の新聞の状況をまとめる。日本新聞協会HPにある次頁の表「世界主要国・地域の有料日刊紙の発行部数」によると、人口が14億人を超えている中国とインドでは年間1億3000万部以上発行されている。また人口3位のアメリカでも2000万部以上発行されている。しかし一方で発行部数が100万部を切っている国も多く、ギリシャやルーマニアは10万部を切っている。どの国も毎年減少を続けておりたった3年間で発行部数が3分の2になった国もある。海外では日本以上に深刻な新聞離れがあり数年後には新聞の存在がなくなっている国もある予想される。

一方、アメリカなど早くからデジタル化を進めてきた国では減少する売上高に対してデジタル版の収入は増加しているという。新聞事業の雇用についても減少傾向にあり、新聞記者が約60%も減少しているのに対し電子メディア部門の従業員は増加。やはりここにもデジタル化が関係しているのだろう。

ではこうした世界情勢において日本の新聞はどのような状況に置かれているのか調べてみると日本の発行部数は他の先進国よりも顕著に多い。この表には日本は含まれていないが、2023年度の発行部数は2859(万部)。これは中国、インドに次ぐ世界第3位の発行部数であり、第4位のアメリカ、第5位のドイツを凌ぐ結果である。世界にとって日本は新聞大国であり長い年月をかけて確立してきた信頼のおけるメディアであると言える。

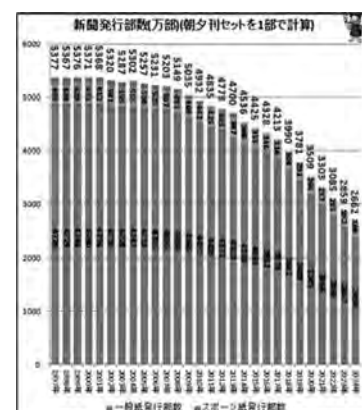
地域・国	発行部数（単位＝千部）		
	2021年	22年	23年
欧州			
オーストリア	1,746	1,511	1,312
ベルギー	993	955	912
チェコ	781	695	618
デンマーク	431	399	336
フィンランド	706	587	481
フランス	4,467	3,982	3,532
ドイツ	15,397	14,735	13,799
ギリシャ	100	86	72
ハンガリー	765	684	613
アイルランド	307	264	229
イタリア	1,480	1,333	1,200
オランダ	1,908	1,719	1,547
ノルウェー	1,118	977	847
ポーランド	1,361	1,231	1,083
ポルトガル	143	127	113
スウェーデン	1,180	999	826
スイス	1,710	1,528	1,352
イギリス	6,607	5,534	4,728
北米			
アメリカ	25,600	22,903	21,234
カナダ	3,170	2,647	2,581
南米			
アルゼンチン	741	609	521
ブラジル	6,326	6,260	6,136
チリ	393	361	332
コロンビア	862	818	777
メキシコ	6,223	6,109	5,882
ペルー	1,711	1,678	1,621
アジア			
中国	143,168	141,350	138,633
香港	3,080	2,981	2,907
インド	130,336	132,294	133,678
インドネシア	4,633	4,628	4,406
マレーシア	1,815	1,732	1,644
パキスタン	5,865	5,980	6,075
フィリピン	2,925	2,810	2,730
シンガポール	477	419	371
韓国	5,884	5,417	4,976
台湾	2,823	2,741	2,670
タイ	6,701	6,689	6,580
アゼルバイジャン	153	150	148
ウズベキスタン	745	741	730
オセアニア			
オーストラリア	721	680	614
ニュージーランド	206	185	165
中東			
エジプト	4,323	4,171	4,007
イスラエル	558	512	480
サウジアラビア	1,914	1,839	1,725
トルコ	4,058	3,387	2,979
アラブ首長国連邦	753	715	679
アフリカ			
ケニア	193	193	190
ナイジェリア	447	437	427
南アフリカ	747	674	606

第2節 新聞の発行部数の推移

最近よく耳にする「新聞離れ」。発行部数が減少傾向にあることは周知の事実だが、具体的にはどのように減少しているのだろうか。一般社団法人日本新聞協会HPのデータをもとにしたグラフでその推移をみた。

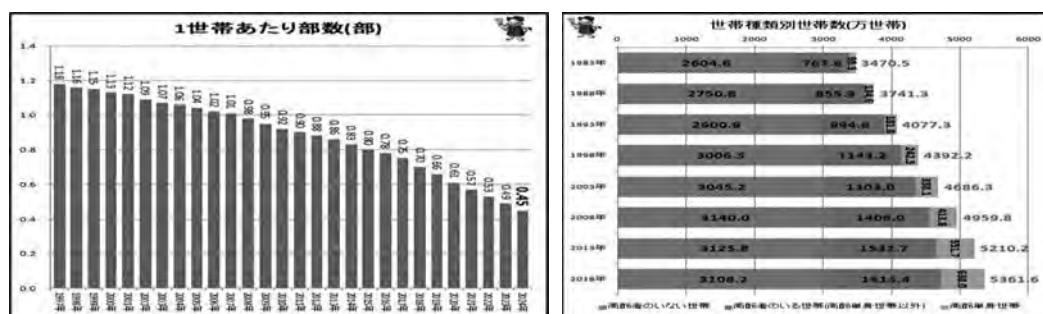
これによると発行部数のピークであった1997年から新聞の発行数は毎年減少し続けている。初めは緩やかな減少だったが、2015年を過ぎたところから急速に減少し始め2024年には約半分の2662万部まで落ち込んでいる。直近の2023年から2024年の1年間の減少部数を見ると、197.4万部。割合にして6.9%も減少。このままのペースで減少が続けば、20年以内に紙の新聞は消滅してしまうと言われる。

次に、日本ABC協会がまとめたデータをもとに国内の新聞社ごとの増減を見てみる。2024年10月の日刊紙の朝刊販売部数を見ると全体では2354万部で前年同月に比べて159万部、割合にして6.4%の減少となった。全国紙では読売新聞が575万部で36万部6.5%減。朝日新聞は333万部で21万部6.1%減。毎日新聞は136万部で25万部15.5%減。日本経済新聞が135万部で6万部4.5%減。産業経済新聞が83万部で7万部7.9%減。以上全国5紙の合計で96万部減少しており、これは全体の159万部の減少の60.3%を占めている。主な地方紙の減少率は全国紙に比べまだ低いところも多いが少なくとも8紙が全体の減少率である6.4%を上回っている。



毎日新聞と産業経済新聞は2024年10月1日から富山県への新聞発行をやめている。毎日新聞においては取材拠点は維持しているが産業経済新聞は全面撤退という形をとった。これは全国紙からの脱落と言えるだろう。これにより「5大全国紙-3大ブロック紙-県紙-地域紙」という戦後長い間続いてきた新聞業界の秩序が崩れ始めているのは間違いない。

世帯数と新聞発行部数を比して「1世帯あたりの新聞部数」を算出したグラフを見ると、1997年は1.18と1世帯で一部以上取っている場合が多かったが、2008年には0.98と1を切ってしまった。そして2024年には0.45となり2世帯に1部も取っていないという状態になってしまっている。総発行部数で見るときは急激に減少を始めた年があったけれど、世帯で考えるとほとんど同じペースで減少し続けている。



第3節 なぜ新聞が必要とされなくなったか

ここまで、かつて新聞大国と呼ばれた日本における新聞の需要がなくなり発行部数が減少しているという現状をまとめた。ここからは本論文の疑問「なぜ新聞の需要がなくなったのか」を明らかにしていく。

いくつかの文献を総合し、新聞離れの理由を以下の4点に分けてまとめた。

(1) インターネットの発達

『2050年のメディア』によると、1995年windows95の発売を契機に一般家庭に普及したインターネットの発達によってメディアの構造は大きな変化を迎える。日本の新聞社や通信社がインターネットの波に対応したのは早く、90年代半ばには各社、web版をスタート、朝日や読売、産経、毎日といった全国紙が、自社のウェブサイトやヤフーに自分たちの新聞の記事をほぼ無料で提供していた。しかしこうした過剰なサービスは人々に新聞はただで読めるものという意識を植え付けるのに十分な役割を果たし一方で各社のブランドが果てしなく希薄化することにもつながってしまった。

そんな中、1社だけ例外を行く新聞社があった。日本経済新聞である。日本経済新聞だけは、「NIKKEI NET」で「3割ルール」というものを定め、本紙に掲載された記事の3割しか無料では読ませないことをルール化するとともに、NIKEI NETの編集部の独自取材で運営した。2010年3月23日「日本経済新聞電子版」が創刊すると、当時デジタル有料版を出していた新聞社は日経新聞を除きたった1社だった。現在デジタル有料版の売り上げで持続可能になっているメディアは最初からwebでも有料にしており、無料で読むことができるプラットフォームには記事を提供していない。

2章1節でも触れた通り、アメリカの新聞は日本よりも10年早く廃れる危機が訪れていたのだが、それはアメリカの新聞の収入の約8割が広告収入に依存していたからだった。アメリカの新聞の場合全国紙というのはUSAトゥデー紙しかなく、後は主に地方紙だったため、広告の多くは、ナショナル・スポンサーではなく地域の不動産広告や求人広告、といったクラシファイド・アド(Classified Ad)と呼ばれるものだった。このクラシファイド・アドが、インターネットによって大打撃をうけたのだ。ネット上に地域の様々な情報を交換するクレイグリストというサービスが1995年に登場し、紙の新聞のクラシファイド・アドの市場を根こそぎ奪っていった。ここに2008年9月からのリーマン・ショックが追い打ちをかけ、2004年から2018年にかけてアメリカでは、1800の新聞(日刊、週刊あわせでの数字)が姿を消した。15年

間で新聞全体が失った部数は、1億2200万部～300万部なので実に4900万部の減少だ。

ニューヨーク・タイムズも例外ではなく広告の引き上げが続き、売上は激減した。リーマン・ショック前の2008年には19億1600万ドルあった売上の4分の1が蒸発、2009年には売上が、15億8000万ドルまで下がってしまう。株価は5ドルといった水準まで下がった。人々が紙の定期刊行物にお金を出さなくなっていた経緯はここにある。

またアメリカではiPhoneの発売が日本より1年早く、スマホは日本以上に広がっていた。しかし有料デジタル版は開発していなかった。そしてインターネットが始まって以来長く無料広告モデルでただで外に出すという日本の新聞社と同じ過ちをおかしていた。

やはり、インターネットの普及、そして情報の無償提供は、人々を新聞という紙媒体から遠ざけた最大の要因と考えることができそうだ。

(2) 読解力の問題

朝日新聞2024年11月22日の記事によると、現在の日本では一般的な読解力の水準低下が問題視されている。「基礎的読解力」を調査する試験によると日本の中高生の多くが「中学校の教科書の記述を正確に読み取ること」ができていない結果が浮き彫りになった。また仮想の「図書館の蔵書検索」システムで条件に合う本を選び表示された情報から書名と著者名を一致させるといった基本的な読解力を回答者の3割弱が満たさないこともわかっている。短文のSNSの投稿でさえ意図が伝わらず無用な衝突も起きている現状で、このような読解力の低下から新聞記事レベルの読解に難渋することが良くある。読解力が不足しているせいで記事が読めないし、読めないから新聞を読まなくなっているというのは、新聞離れのまっとうな理由であるとも言えるだろう。また同記事によると、新聞は体裁面にも問題があるといい、識者へのインタビュー記事などで質問部分と識者の回答部分の区別が弱く混同しそうになるといった記事の「難しさ」が人々を「読む」という行為から次第に離れさせたのだと分析されている。

(3) 「紙」媒体という新聞の形態

現在、新聞を読んでいる人のほとんどが新聞を月極でとっており、それらの92%が紙の新聞だと言われている。紙の新聞をとる理由は「新聞を読むのが習慣になっているから」「新聞でなければ得られない情報があるから」などが挙げられたのだが、半数の人が新聞を読む理由が「習慣」によるものだといっても、残りの半数の人が新聞を読まない理由が「習慣」がないからだとするのは正しいとは言えない。「テレビやインターネットなど他の情報で十分だから」「新聞を読む時間がないから」といった理由の裏側には、定期刊行であるがゆえに情報量や新鮮さ、速報性などが他のメディアにどうしても劣ってしまう点もうかがえる。情報の面白さ、分かりやすさ、そして手軽さなどの点に難しさがあるようだ。(第17回メディアに関する全国世論調査より)

またそうした意味で「紙」媒体という前時代的な{スマートでない}形態は大きな難点であると言えることができるだろう。持ち運びにも苦勞し、後処理にも苦勞する、個人では記事の検索もスムーズにおこなえない媒体はもう古い。時代は持続可能なSDGsを実現することが大前提とされる社会であり、ペーパーレス化が進む社会において、「紙」はあまりにも脆弱なプロダクトであると言える。

(4) 購読料という負担

新聞を読まない理由の1つとして「新聞の購読料は高いから」というものがある。「第17回メディアに関する全国世論調査」における「購読料に関するアンケート」によると、新聞の購読料を「かなり高い」と「高い」と回答した人は合計で50%を上回った。それに対し「少し安い」と「かなり安い」と回答した人は2%にも満たなかった。さらに購読者率が比較的少ない20～30代の中で新聞を高いと答える人が半数を超えた結果も注目すべき点である。これは未来の日本を担っている世代のほとんどが新聞の購読料は割に合わないと考えているということを意味しているからだ。

無料で情報を得ることができるインターネットの発達によって、新聞に対する需要はどんどんなくなっている一方で、無料で新聞を読むことができても読まないと言う人も16%いる。それは(2)であげたように

新聞の内容が関係していると考えられる。一紙だけでは情報が偏るが、複数紙をとる余裕はないのだ。(3)でもあげたように、そもそも情報量や新鮮さが他のメディアに劣るのに料金を払う必要性がないゆえに、結果コスパが悪いという印象が強まっている。

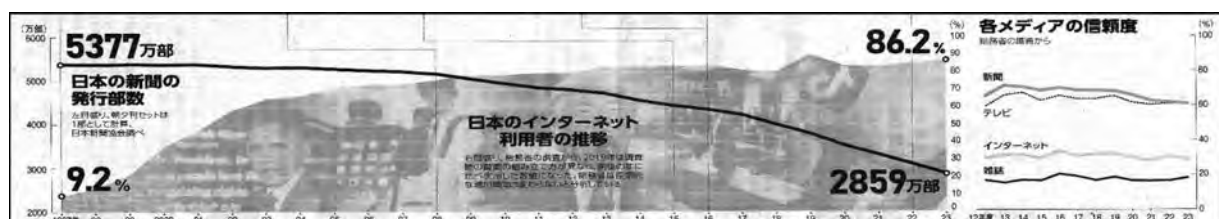
このように、とりわけ若い世代にとって新聞というメディアは日常生活から大きく外れた存在にある。情報接触の動線がスマホやPCに集約される現代において紙の新聞を広げる余地はないのだ。さらに「新聞＝親世代のもの」という認識が根強くライフスタイルへ親和性が失われている。このように料金と価値の崩れたメディアにお金を払い続ける理由はあるはずもなく、こうした理由が重なって新聞離れは一向におさまらず進み続けているのである。(広告豆知識の記事「読者が新聞から離れる本当の理由」一部引用)

[第3章] 新聞の未来

第1節 新聞信頼度

前章において本論文における疑問に対する答えを整理することができた。ではこうした斜陽産業となりつつある新聞業界は今後どうなっていくのか、本章では新聞の存続、その未来について考えてみたい。

1997年からの約30年間で核家族化が進み、世帯構造に大きな変動が見られた。世帯数そのものは増加し、あわせて少子高齢化の影響により高齢世帯が増加しているのである。これにより旧来メディアの利用時間、利用者数は増加するように思われるが、テレビは増加傾向にあるのに対し、新聞は全世代で「新聞離れ」が起こっているのが現実だ。今後高齢層の新聞離れが進んでいけば読者層に高齢者を多く抱える地方紙の部数がさらに減っていくことになるだろう。



しかしそんな新聞も日本のメディアにおける重要度こそ高くないものの、信頼度では1位を誇っている。(2025年4月30日 朝日新聞)テレビと接戦ではあるがまだ新聞が上回るのだ。また、信頼度だけで考えると新聞はインターネットを遥かに上回っており、なんとインターネットの約4.5倍だというデータもある。第2章で述べたように特に若者にとっての新聞は需要の高いメディアではない。しかし最もインターネットを利用しているであろう世代も「新聞は信頼できるメディアだ」と答えている。その理由として挙げられるのは「情報が正確だから」「公正・中立な立場で報道しているから」だ。(参照:全国世論調査)

読売新聞2025年6月11日の記事によると同志社大学教授の池田謙一さんは「若い世代を中心にネットへの接触が増えているが多くの人はSNSなどで見られるマスメディア批判の影響を受けておらずマスメディア全体の公正さに対する信頼は失われていない」と指摘している。

この章を執筆している7月現在、参議院選直前ということもあり、SNSや動画サイトなどを使って選挙運動を行う「SNS選挙」の報道が加熱している。SNSを利用する選挙は誰もが発信・拡散できるため虚偽の情報が流れることもあり、さらにはそれが選挙結果に影響することもある。それに対し、信頼度で1、2位を争う新聞やテレビは匿名性がなく発信することができる人が限られているために誤情報が流れる危険性は低くなる。そうした新聞というメディアの特性も信頼度に繋がっているのだと考

えられる。確かに新聞は利便性には長けていない。だが、「信頼できるメディア」であるという認識は各年代に根強く残っている。それゆえ、信頼できるメディアというニーズさえあれば、またほかのメディアが「信頼できない」側面の問題点をクリアすることができない限り、オールドメディアと呼ばれても、存続に希望を持てるということもできそうだ。

第2節 地方新聞の未来

もう1つ、新聞の未来を考える上で大きなヒントとなるものに「地方新聞」が挙げられる。

全国紙は2008年から2024年までで購読率が約30%減少したのに対し地方紙、ブロック紙は約6%の減少と非常に健闘している状況がある。つまり大幅に減少を進めているのは全国紙だと捉えることができる。ではなぜ地方新聞はこうした新聞不況の中で、生き残ることができているのだろうか。

『持続可能なメディア』によると北國新聞は2013年のピークからの減少は9%である。朝日新聞はピークから約50%、地方紙にも約30%減少している新聞がある中で、北國新聞が大幅に減少しなかったのは「歴史と文化」にこだわる紙面に見られる「編集」マインドにある。北國新聞1面は共同通信の記事を使うことはほとんどなく、地元の文化や歴史についての記事が掲載される。「金沢の歴史と文化」を重視して掘り下げどんな大きな全国ニュースであろうと1面で展開しているのだ。それは読者が「じわもん(自腕物)」「文化の自家消費を金沢言葉で表現」を欲していることを理解しているからこそできることだ。

また一面以外の記事もアングルに工夫のある記事が多い。たとえば2023年3月9日には、金沢の全小中学校で飼育されているうさぎの数の推移を調べ、5年で半減したことが社会面で大きく扱われた。記事は、教員の「働き方改革」との関係のなかからうさぎ飼育の減少を分析しているところがみそだ。要するに記者の創意工夫がある記事を大きく扱っている。このように「新聞に向かない」記事も常識に逆らい掲載する北國新聞の記事は、金沢の本質である「文化の自家消費」を重視しているとも言える。

ここで私たちにとって最も身近である中国新聞についてもふれておきたい。中国新聞社のHPのデータによると2025年4月の発行部数は45万部を超えており、これは広島県内普及率30.64%となり県民の約3分の1が購読していることになる。全国紙の発行部数が急速に減少し始めた2015年には61万部発行されていたが、10年間で約16万部の減少、2024年から2025年の1年間では約3万部、割合にして約5%減少している。中国新聞も北國新聞と同様に減少スピードが緩やかな地方紙であると言えることができる。ならば中国新聞にも北國新聞と同様に必要とされる確固たる理由があるはずであり、それは間違いなく平和についての記事、そして広島東洋カープについての記事にあると言えるだろう。世界で初めて被爆した土地の使命感もあって平和についての記事には定評がある。毎年8月には6日を中心に原爆や平和に関する特集記事が上げられ県全体で平和について考える機会を生んできたが、今年は戦後80年という節目の年であり1年がかりで平和記事特集が組まれている。

また、広島東洋カープは広島の復興の象徴として市民に愛されてきた。プロ野球球団の中では唯一の市民球団であり市民の支援を基盤とする地域密着型のチームである。カープに関する情報量の多さにおいて中国新聞は唯一無二の存在であり、市民球団を支える市民の支持があるがゆえに、県民の3人に1人が読む部数発行につながっていると考えてもよいだろう。広島の復興を願う人々、そして地元を愛する人々にとって平和とカープに関する記事は必要不可欠なのだ。また、広島には野球のみならずプロサッカーチーム(サンフレッチェ広島)とプロバスケットボールチーム(広島ドラゴンフライズ)が存在し、スポーツ観戦率が全国1位になるほどのスポーツ大国であることも新聞購読の下支えになっていると考えられる。

四国や日本海側の県では人口が少ないため発行部数はそれに比例して少なくなるが、地方紙の県内普及率は高く徳島県で70.46%、福井県で71.75%と12の県が50%を超えている。2020年の読売新聞社の調査では37都道府県で地方新聞がシェア1位を獲得していることも明らかになっている。地元の人からの手堅い支持が地方紙の衰退を食いとどめており、他の地方紙約70紙でも同じように減少傾向にあることに変わりはないが全国紙の減少率よりも低いことから地方紙は比較的生き残りやすいの

ではないだろうか。記者や編集者が何人いようが読者にはほとんど違いが分からない。読者にとって大切なのは、そのメディアがそこでしか読めないもの、見れないものを提供してくれるかどうかなのである。地方新聞は記事を届ける先が地域であるため共同の内容を減らし、地域住人のニーズに合った情報発信をすることができるがゆえに重宝されている。このように考えると、新聞というメディアは「地方」という視点で生き残る可能性も十分に秘めていると考えられる。

[第4章] フィールドワーク

ここまで書籍やインターネットを利用し、新聞の存続という問題にアプローチしてきた。そうした過程の中で、新聞というメディアが衰退したことについてのいくつかの理由は明らかになったものの、明確な理由は明らかにならなかった。そこでこれからの新聞、そしてこれからのメディアについて専門家の意見を聞いてみたいと思いフィールドワークを計画・実施した。

第1節 フィールドワークの概要

メディアの歴史に詳しい研究者は数多くおられるが、今回インタビューを申し込んだのは、本論文でも参考文献として使用した『メディアの歴史から未来を読む』の著者であり、同著をもとにNHKテレビ番組「こころをよむ」で13回に渡るシリーズ放送を担当された立命館大学産業社会学部の飯田豊教授である。飯田先生は広島県福山市生まれ、東京大学大学院学際情報学博士課程単位取得退学という経歴をお持ちの若き研究者である。専門はメディア論、メディア技術史、文化社会学で、これからのあり方を構想することに深く関心をお持ちだということだ。同著には放送時間等の関係で新聞について書かれたトピックが少なく、メディアの今後の中でも新聞についてどのような考えをお持ちかをお聞きしたいという旨のお手紙を書き、zoomにてインタビューをさせていただいた。

2025年9月26日(金)13時より、飯田先生に3つの質問をし、それぞれに回答をいただいた。3章ではその質問に対する回答をまとめていきたい。

また、盈進中・高の卒業生であり、中国新聞の記者として活躍されている山本真帆先輩の話も聞かせて頂く機会を得た。現場から見た地方紙の現状・未来について直接教えて頂いた内容を併せて記す。

第2節 フィールドワークの結果

(2) 飯田先生へのインタビュー

【質問①】なぜ新聞は衰退したのか

最も大きな要因としてはインターネットが挙げられる。(ただインターネットの情報ももとを正せば新聞社や放送局が調べた記事ではあるのだが。)ではなぜインターネットなのか。それは受け手の受け取る情報の性質が、「自分の欲しいもの」に変化してきたからだ。それぞれの人が持っている関心がバラバラになり、共通の話題や国民的な関心事が減ったことにより全国の情報を掲載する新聞の需要がなくなったのだとすることができる。全国紙である以上様々な人が読むため、特殊な関心事にフォーカスできないということもある。テレビも同じ状況であるが時間ごとに視聴対象が絞られる傾向もあるため、深夜帯に放送するなどで対応することができている。また理由の1つには、動画文化の定着もある。SNSの発達により映像を見る時間が増え、同時に文字を読む機会が減ったと言われている。しかし画面の中で文字を読むことは多く、新聞の衰退が文字離れと大きな関係があるのかという部分は不確実である。

【質問②】なぜ日本の新聞は海外と比較して生き残れているのか

そこには日本におけるメディア網の構造が大きく関係していると思う。日本ではごく当たり前のことと受け止められている個別宅配システムの発達は世界にもまれな状況で、新聞は家に届けられて読

むものであるという認識が強くあるのはそのためである。海外ではキオスクと呼ばれる駅のスタンドで販売してあるもので、新聞は通勤中に読む人が買って読むものという感覚が強い。それに加えて例えばアメリカでは西と東に時差が3時間もありそれぞれの関心事が大きく異なるため、地域新聞しか需要がなく売れにくいといったようなことも理由として挙げられる。

【質問③】日本のメディアはこの先どうなるのか

新聞がこの先生に残っていくには、値上げをしなければ発行部数と人件費の釣り合いをとることが難しい状況にある。しかし既にコストが高いという問題がある中で値上げをおこなうことは難しいので、残念ながら紙の新聞が持ち直す余地はない。質問②において、日本は個別宅配システムが進んでいると言ったが、人件費削減を考えた上でも、田舎の個別宅配からなくなっていくだろう。だから紙の新聞はすぐにはと言わないがいつかはなくなると考えられる。そのため新聞というメディアは、紙ではなくインターネットの中で老舗の事業者として生き残っていくしかその道が残されていないと予想している。

新たなメディアとして考えられるのは、やはり生成AIを利用したものが中心になるのではないか。だがAIは存在しないものを1から作り上げてしまうので基本的に信用することができない。だからAIが中心になってしまうとアップされた1枚の写真に対してもそれがそもそもAIが作り出したものなのか、そうならばその情報は正しいことなのかという点について疑いの目を持つてしまうようになる。そうすると何を信頼すれば良いのか分からなくなりメディアはますます信頼できないものになってしまう。

SNSは不特定多数の人が情報を発信することができる手段であり、そのため虚偽の情報でも出回ってしまう。しかし新聞の発行には著作権や、景品表示法、薬事法、特定商取引法など、内容に応じた法律・ガイドラインなどを遵守し、必要に応じて新聞社や著作権管理事業者（日本複製権センターなど）からの許諾を得る必要がある。特に、他社の記事・写真の無断転載・複製・web掲載は著作権侵害となるため、「新聞記事・写真使用許可申請」が必要。テレビの放送には電波法に基づく総務省からの放送免許、著作権法に基づく放送権（放映権）の許諾が必要であり、特定の人にしか発信することができない。そのため正しい情報を伝える新聞やテレビの価値が高まるだろう。



（飯田先生へのZOOMインタビュー）

（2）山本真帆先輩の話

2018年に中国新聞社に入社され、地方新聞の記者として活躍されている山本さんにはご自身の体験ならびに地方紙（中国新聞）の現状や対策について教えていただいた。

地方紙は地域の人の言葉を反映しやすく読者からの声で記事が決まったり、地域の人の顔や言葉を掲載することで地域の住民を動かすことができたりするところに大きな存在価値がある。山本さん自身も東日本大震災の際に福島に行くきっかけとなったのが新聞に載っていた住民の声だったという経験をお持ちで、西日本豪雨の際に載せた記事をきっかけに被災地に行った人がいるなどという例から考えてみても、地方紙は小さなことでも人を動かすことができるものであり読者の切実な思いや地域の課題にアプローチすることのできる重要なものだという。しかし地方紙の問題として挙げられたのが人手不足である。各地にある販売所から伸びている配達網も配達する人がいなくなってしまう。コストもそうだがそもそも人がいないので個別配達が難しくなっている。

中国新聞社では発行部数の減少に伴い内容やデジタル発信強化などの対策をとっている。内容に関しては若年層や高齢層からの意見をもとに文字だけではなくイラストやデータでの解説をしたり文字を大きくしたりしている。またデジタル面では「みみみ」というアプリや



「U-35」という若年層向けのInstagramアカウントの作成をしている。これらは文字が多いと読む気になれない人や簡単に情報を受け取りたい人向けに作られていて、ジャンル別に記事を読んだり難しい内容を図やイラストでわかりやすく知ることができるようになっている。

今年は被爆80年という節目の年であり、中国新聞でも「ヒロシマドキュメント」という企画に1年がかりで取り組み、山本さんはその取材班に抜擢された。被爆の実相は未だ解明されていない部分は多く、「今しか聞けないこともあるし、今だから聞けることもある」というスタンスで臨んでこられたという。被災地の新聞記者としての使命感のようなものをひしひしと覚えることもできるお話だった。

〔終章〕 おわりに

私はメディアに興味があったことをきっかけに「新聞の未来」というテーマのもと論文の執筆することを決めた。そこで「なぜ新聞は必要とされなくなったのか」という疑問に対し「インターネットの急速な普及が関係しているのではないか」という仮説を立てた。

第1章では新聞とは何か、どのような歴史を歩んできたのかを本とインターネットを用いて調べた。新聞は戦前に生まれ民衆が同じ情報を得るためのメディアとして大切にされてきたことが明らかとなった。

第2章では統計データと本をもとに海外と日本の違い、発行部数の変化についてまとめた。日本は世界的に見ると新聞大国であること、そんな日本でもなぜ発行部数が減少したのか書籍をもとに解決した。

第3章ではデータ、新聞記事、書籍をもとに新聞にはどのような未来が来るのか、どのように生き残っていくのか自分なりに考察した。信頼できるメディアとしての価値、地方特有の情報が発信できるという点を活かせば存続できるのではないかという結論に至った。

第4章では新聞、メディアについて専門家からの意見を聞いてみたいと思い、メディアを専門として研究をされている立命館大学教授の飯田豊先生と中国新聞社で記者として活躍されている山本真帆さんにインタビューをさせていただいた。そこで新聞が衰退した原因、新聞(メディア)の未来について質問した。新聞が衰退した主な原因はインターネットが考えられる。だがそれだけではなく人手に関する問題や記事の内容も関係しているという共通の回答をいただいた。学問の最前線で活躍する飯田先生の見解と、現場の最前線で活躍する山本先輩の意見を伺うことで、私自身の探究活動もさらに深まったのは間違いない。このフィールドワークから、私の仮定は一部合っていたということも確認できた。

執筆を通してこれまで長い歴史にわたって必要とされてきた新聞は、他のメディアの台頭やコストなどの問題により現代社会におけるその需要はなくなりつつあることが分かった。しかしこうした衰退に大きく関係してきたテレビというメディアもテレビ離れが進み、インターネットも他のメディアに移り変わっていく可能性があることも見えてきた。この先メディアは大きく変わっていくことになるだろう。2025年の新語・流行語大賞に新聞・雑誌・テレビ・ラジオといったインターネット普及以前から存在する4大メディアの総称を指す「オールドメディア」がノミネートされた。こうした背景にはこれまで正しい情報として広く情報を発信してきたメディアがどうなるのか注目され、それらが「デジタルメディア」として台頭してきたニューメディアに取って替わられることを予見する動きがうかがえる。

しかし私たちの生活にとって情報というものは必要不可欠なものであり、国の方向性を決定づける選挙報道や経済活動の支柱となる物価や為替の変動といった大きなニュースはもちろんのこと、熊の出没やカキの不漁といった暮らしに直結する身近な話題を取材、調査し、正しく伝えるメディアも絶対的に必要なものだ。だから将来的に形を変えることになったとしても、新聞やテレビの本質にある「情報を伝える」行為は残していかなければならないことは確かだ。今後は新しいメディアが台頭することで起こる問題、たとえば真偽不明な情報が増えるといった社会問題に直面した際に、メディアリテラシーを持って向き合っていくことが大切であると言える。人類が築いてきた信頼できる古くからのメディアを未来に繋げていくため、メディアを信頼できるものにするために自分には何ができるのか考え続けていきたい。

参考文献

〔書籍〕

- ①総合百科事典「ポプラディア」第八版(2021年 ポプラ社)
- ②飯田豊「メディアの歴史から未来を読む」(2024年 NHK出版)
- ③下山進「2050年のメディア」(2019年 文春文庫)
- ④下山進「持続可能なメディア」(2025年 朝日新書)

〔新聞〕

- ①朝日新聞2024年11月22日
- ②朝日新聞2025年4月30日
- ③読売新聞2025年6月11日

〔インターネット〕

- ①日本新聞協会 <https://www.pressenet.or.jp>
- ②日本ABC協会 <https://www.jabc.or.jp>
- ③第17回メディアに関する全国世論調査 <https://www.chosakai.gr.jp>
- ④広告豆知識 読者が新聞から離れる本当の理由 <https://koukokudairiten.info>
- ⑤中国新聞社 <https://chugoku-np.com>

[佳作論文] 人体におけるかゆみの必要性

3年A組 古田 紗衣



[受賞の感想]

私がかゆみについて探究しようと思ったのは、昔アトピー性皮膚炎を患っていたのもあるでしょうが、恥ずかしい話なんとなくしかり言えようがありません。そんななんとなく決めたテーマが私の成長に大きく貢献してくれたと思います。

かゆみというものを書籍等で調べていくうちに皮膚構造から神経、化学物質、脳活動など今まで興味がなかったであろうものにどんどん引き込まれていきました。それらを面白いと感じ、多くの人に知ってほしい、という感情が日を迫るごとに増えていきました。そしてどの情報を論文で使うかをとても悩み苦労しました。けれども、それ以上に執筆をする楽しさが私の中に多くありました。

皮膚科医になりたい。そう強く思ったのはここ1年の話です。私はそれまであまり自分自身の将来について深く考えることができませんでした。どこか他人事で自分が何が好きで、何がしたいのかもよくわかりませんでした。けれども、今回の探究活動で「かゆみ」について調べ、自分のなりたい姿が見つけることができました。皮膚の面白さ、かゆみなどの皮膚の症状に苦しむ人の多さ、かゆみ研究の進歩、私自身がかゆみに悩んでいたのもありますが、何よりフィールドワークの際に私の夢について背中を押してくれた方がいたことがとても大きいです。そこから皮膚科医になろうという決意が私の中でできました。私が最終的にどんな職業に就くかはわかりません。ただこの修了論文は私に物事を探究する大切さを教えてくれた何にも変え難い経験であると断言できます。

目次

[序 章] はじめに

- 第1節 動機
- 第2節 疑問と仮説

[第1章] 基本知識

- 第1節 かゆみとは
- 第2節 皮膚の構造と感覚機能

[第2章] かゆみを感じて

- 第1節 かゆみのメカニズム
- 第2節 かゆみと別の知覚
- 第3節 掻くことで起こること

[第3章] フィールドワーク

- 第1節 新聞信頼度
- 第2節 地方新聞の未来

[終 章] おわりに

参考文献

[序 章] はじめに

第1節 動機

私は幼い頃「アトピー性皮膚炎」に悩まされていた。背中などが常にかゆく、とても不快だったことを覚えている。そうした症状は今は完治した状態だが、日常生活を送る中で、虫刺されや乾燥など言い出したらきりが無い程痒みを感じることもある。熱さ、冷たさ、痛みは生物が生きるために必要な感覚だと私は感じる。しかし、かゆみという感覚はどのような必要性があるのだろうか。かゆみの持つメッセージ性や、もし、かゆみがなければ日々の生活に何らかの支障があるのか非常に興味深い。

そこで私は、この修了論文で「かゆみ」について追究しようと考えた。

第2節 疑問と仮説

この修了論文で私は「かゆみの必要性」というテーマのもと以下の疑問をもった。それは「かゆみとは何なのか、そしてなぜかゆみという感覚が人間に備わっているのか」という疑問である。私は過去に、兄をくすぐってみたところ「かゆい」と払い除けられた。そのため、この疑問に対して「かゆみはくすぐったさの延長線ではないか」という仮説を立てた。また、腕など皮膚に何かが付着していたとき、その部位を無意識のうちにかくといった経験があり「皮膚についた古い角質や虫刺されなど人体に不要なものを体から取り除くためではないか」とも考えた。これから、書籍、インターネット、ならびにフィールドワークを通して明らかにしていきたい。

[第1章] 基本知識

第1節 かゆみとは

『広辞苑』によると「かゆい」とは「皮膚を掻きたいような感じ」を指す。そして、このかゆみという感覚は、1660年に、ドイツの医師ハーフェンレファー(Hafenreffer S)によって「掻きたいという衝動を引き起こす不快な感覚」と定義された。しかしこの定義は抽象的な言い回しである。

そこで以下に具体的な定義を紹介する。まず「あおきクリニック・かゆみ研究所」の青木敏之先生がまとめたものによると代表的なものに「虫が這うような・刺すような・焼けるような・チクチクする・イジイジする・ムズムズする・ピリピリする・ツンツンする」といった表現が挙げられる。

一方、アメリカでもかゆみの表現について、調査が行われており、マイアミ大学医学部のギル・ヨシボビッチ教授らの研究チームによると「tickling(くすぐりたい)・singing(ピリピリする)・crawling like ant(ムズムズする)・stabbing(刺すような)・pinching(つまみたくなるような)・annoying(厄介な)・burning(灼熱感)・unbearable(耐えきれない)・worrisome(気をもますような)」などがある。

第2節 皮膚の構造と感覚機能

前節において「かゆみ」の定義が明らかになった。そこで次に、かゆみを感じる皮膚の構造と感覚機能についてまとめていきたい。『今と未来がわかる皮膚の科学』によると、皮膚は人間の全体を覆っているもので、その面積は約 1.6m^2 、およそ畳一枚分になる。毛穴のような凹凸を含めると 25m^2 になり、畳15枚半にあたる。重さにおいても皮膚は体重の16%を占めている。体重が50kgだった場合、皮膚の重さが8kgとなる。そのため皮膚は「人体最大の臓器」とも呼ばれている。皮膚には、物理的・科学的な刺激から体を守る、圧力や温度を感じる感覚器としての役割、水分の損失や浸透を防ぐ、体温調節、さらに病原体などから体を守る免疫器官としての役割を担っているなど、人間が生命を維持するために欠かせることのできない多様な機能を持っていることがわかる。

皮膚は、表皮・真皮・皮下脂肪組織の3層で構成されている。以下に整理してみる。

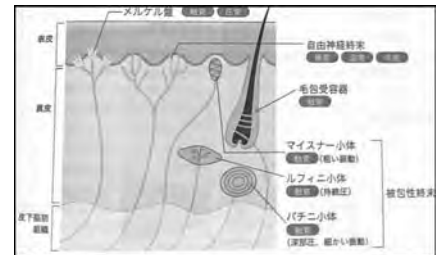
- ①表皮…厚さ約0.2mm。表面から角質層、顆粒層、有棘層、基底層かの4層で成り立つ。異物や病原体、紫外線などから体を守る。体内から水分の蒸発などを防ぐ機能を持つ。
- ②真皮…厚さが表皮の15～40倍。膠原繊維(こうげんせんい)や弾性繊維、血管などの組織で構成されている。毛包、脂腺や汗腺と呼ばれる皮膚付属機と呼ばれる器官もある。
- ③皮下脂肪組織…皮膚の最も下にあり、真皮と筋膜に挟まれている部分。中性脂肪を貯める、外界からの力に対するクッション機能、体温を保持する役割がある。何らかの圧力や温度など、外界からの刺激を感覚として受け取ることができるものを「感覚受容器」という。皮膚の感覚受容器は、終末小体と自由神経終末の2つに大別できる。

(1) 終末小体

おおむね皮膚の決まった場所にある。

センサーとして機能を発揮するため、無毛部に集中している。

- ①メルケル盤…小さな圧力や凹凸などの触覚を感知する。
- ②ルフィニ小体…皮膚の伸びなど張力を感じる。
- ③マイスナー小体…振動や圧力を感じとる。
- ④毛包受容器…毛根部に神経繊維が巻き付いている。



出典:『今と未来がわかる皮膚の化学』

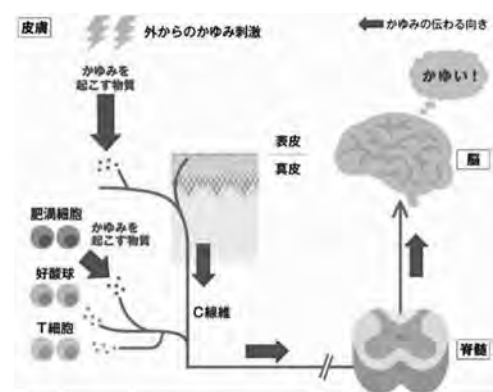
(2) 自由神経終末

侵害受容器とも言われる。神経繊維の末端である神経終末が枝分かれしたものである。痛覚、温覚、痒覚を感じる。皮膚や皮下脂肪組織に多く分布するほか、腱や靱帯、骨膜、神経を覆う膜などにあり、1cm²に約120個、全身に約200万個ある。「C線維」に属し機械的な刺激や熱的な刺激、科学的な刺激などあらゆる侵害刺激に反応する「ポリモーダル侵害受容器」と、「A δ 線維」に属し強い圧力などの機械的な刺激だけに反応する「機械的侵害受容器」の2つがある。

〔第2章〕 かゆみを感じて

第1節 かゆみのメカニズム

かゆみを感じる原因の多くは皮膚の異常によって生じる。虫刺されなどで皮膚の表面に何か作用したり、皮膚の中での炎症・アレルギーが起きたときに、かゆみが生じる。これを「抹消性のかゆみ」という。抹消性のかゆみは、さらにヒスタミンによるもの(ヒスタミン性)と、ヒスタミン以外のもの(非ヒスタミン性)に分類できる。そして、これらのかゆみを引き起こす起痒物質のことを「かゆみメディエーター」という。ヒスタミンは主に「マスト細胞」で作られる。マスト細胞は肥満細胞とも称されているが、肥満と全く関係がない。なぜなら、顕微鏡で見ると、ふっくらとした形をしている。また、周囲の細胞を太らせる栄養補給をしていると考えられ、肥満細胞と名付けられたからだ。マスト細胞には、皮膚内だけでなく、鼻の粘膜、気管支など体の様々な場所に存在している。アトピー性皮膚炎、気管支喘息のような代表的なアレルギー疾患が起こる場所に多くあり、ヒスタミンが、アレルギーの発生に重要な役割を果たしている。2017年までに発見されたかゆみメディエーターとしては、セロトニン(5-HT)、プロテアーゼ、神経ペプチド、脂質メディエーター、サイトカイン、胆汁酸、リゾホスファチジン酸、ケモカイン、硫化水素などがある。これらの、ヒスタミンを含め、かゆみメディエーターが産生され、表皮や真皮にある感覚受容体と結合することで、かゆみを伝える信号である生体電気信号が発生する。すると末梢神経(一次感覚神経:後根神経節ニューロン)が刺激される。かゆみの信号は脊髄後根神経節を經由し、脊髄



出典:「m3.com」

に入り脊髄後角で2次感覚神経に伝えられる。さらに、かゆみを伝える信号は脊髄を上行し、視床を通して大脳皮質に達する。こうして脳の一次体性感覚野に皮膚からの信号が投影されて、かゆみを感じることができる。(上図参照)

かゆみの原因の多くは皮膚の問題。つまり「抹消性のかゆみ」である。しかし皮膚以外が原因でかゆくなることがある。何らかの疾患が原因となって、病的に強いかゆみが持続する場合のことを「中枢性のかゆみ」という。中枢性のかゆみは、皮膚の末梢神経にあるかゆみの受容体ではなく、脊髄や脳などの中枢と呼ばれる部分にある神経細胞の受容体にかゆみメディエーターが直接結合することで生じるかゆみのことである。中枢性のかゆみを引き起こす疾患は右のようなものがあり、患者は「ただなんとなくどこことなくかゆい」と訴える。また、かゆみを伝える神経のほとんどは、神経線維の1つである「C線維」の自由神経終末にある。

● 中枢性のかゆみを引き起こす疾患

①腎疾患	慢性腎不全、血液透析後など
②肝・胆道系疾患	肝硬変など
③内分泌・代謝性疾患	糖尿病、甲状腺機能異常など
④血液疾患	真性赤血球増加症(真性多血症)、鉄欠乏性貧血など
⑤悪性腫瘍	悪性リンパ腫、消化器がんなど
⑥神経疾患	多発性硬化症、脳腫瘍など
⑦膠原病	強皮症、皮膚筋炎など
⑧その他	AIDS、妊娠、各種薬剤

出典:『世界に「かゆい」がなくなる日』

第2節 かゆみと別の知覚

前節ではかゆみのメカニズムについて整理してきた。この節では、かゆみと「くすぐったさ」「痛み」の関係性について明らかにしていきたい。最初に、「くすぐったい」という感覚は『広辞苑』によると「くすぐられてむずむずした感じ」を指す。くすぐったさには「自尊心をくすぐられる」「褒められてこそばゆい」といった表現があり、英語でも「tickle somebody fancy(人の気持ちをくすぐる)」といったように、くすぐりは心理的なくすぐったさも表現している。

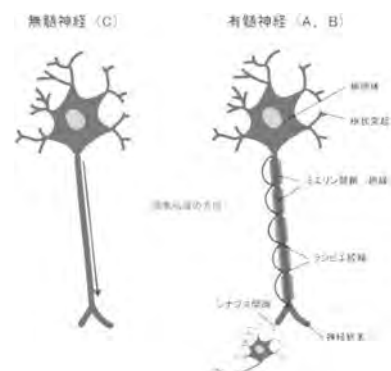
『なぜ皮膚はかゆくなるのか』によると、人はくすぐられると、むずがゆいようなヒヤッとするような感覚を受ける。くすぐったさは、首筋、脇の下、鼠蹊部、足の裏といった太い動脈が走っている箇所を感じやすい。太い動脈が走っている部分には、自律神経が非常に細かく分布しているため、敏感になる。自分自身をくすぐっても、くすぐったさを感じることはないだろう。その理由は脳の働きにある。人にくすぐられるとき、くすぐられた部位の触覚や圧覚などの刺激情報が脳の体性感覚野に達しくすぐったさを感じるのだ。ところが自分で自分をくすぐるときは、小脳から自分の指を動かす指令が出る。そのため、自分の指の動きを予測できるので、自分自身をくすぐっても平気なのだ。つまりだれか他の人にくすぐられるとは、その動きを予測できないがために、くすぐったく感じるのである。要するに「くすぐったい」とは、「人間にとって非常に重要な部位を、他者に刺激されたときに起こる感覚」だ。これは、触圧覚が関係しているが、このくすぐったいという感覚は体性感覚野で感じるのに対し、かゆみは前頭葉で感じる。「かゆみ」と「くすぐったさ」は感じる原因も感じる脳の部位も違う。

では、痛みはどうか。痛みとかゆみは密接な関係にある。実際「痛がゆい」という言葉もある程だ。そこで「痛み」と「かゆみ」の関係性について伝わる神経線維、原因物質、脳活動の3点で整理する。

(1)「かゆみ」と「痛み」の伝わる神経線維の違い

『なぜ皮膚はかゆくなるのか』によるとかゆみを感知する部位は、自由神経終末と呼ばれ、皮膚の表皮と真皮の境界部分に集まっている。痛みもこの自由神経終末で感知される。他の感覚である触覚、関節位知覚などを感知する神経終末は、もっと深い部分にある。そして、皮膚感覚を伝える神経線維は、伝達速度の早い順にA線維、B線維、C線維の3種類に分けられる。A線維は「有髄神経」と言い、髄鞘と言う脂質に神経線維が分割されて包まれており、神経の刺激は髄鞘のあるところをスキップ(飛躍伝達)して伝わるため、伝達がより速くなる特徴がある。C線維は「無髄神経」と言い、髄鞘に包まれていないため、神経線維内をゆっくりと刺激が伝わる特徴がある。

痛みの中でも包丁など鋭利な物で手などを切ったときに瞬間的



出典:「管理薬剤師.com」

に走る「早く鋭い痛み」はA δ 線維を伝わる。A δ は1～5マイクロメートル(1マイクロメートル=1000分の1ミリメートル)で秒速10～29メートル。痛みの中でも腹痛などのじわじわとした「遅く鈍い痛み」と「かゆみ」はC線維を通る。C線維は1マイクロメートル以下で秒速が約1メートルである。これらの神経線維は「太いほど速く伝わる」と言え「かゆみと痛みは、伝達する神経線維が基本的に異なる。ただし一部は同じである」ということもよくわかる。

A線維とC線維には伝わる神経の太さと速さの他に、1つ大きな違いがある。それは、脊髓反射である。脊髓反射とは、手に針が刺さった時、痛みを感じるとさっと手を引っ込めることや、熱い鉄板に触ってしまったら瞬時に手を引っ込めるなどといった行動である。では、虫に刺されたときはどうだろうか。刺された痛みで手を引っ込めることはあっても、かゆみを瞬間的に感じて逃げることはないだろう。つまり、かゆみに脊髓反射がないのである。正しくは、C線維には脊髓反射が無いということだ。

「かゆみ」も「痛み」も皮膚の異常を伝える知覚だが、「痛み」は命に関わるような刺激に反応するが、「かゆみ」は生命をあまり脅かさない刺激に起こると言える。つまり、『痛み(鋭い痛み)』は、速く伝えるために、A線維を伝わる必要があり、脊髓反射という回避行動までもがセットで備わっているのだ。一方『かゆみ』はゆっくり伝わるC線維だけで十分なのである。

(2)「かゆみ」と「痛み」の原因物質

かゆみの主な原因物質は前節で述べた通り「ヒスタミン」である。では、痛みの原因物質はなんだろうか。第1に挙げられるのは「ブラジキニン」である。他にも「プロスタグランジン」「サブスタンスP」「アセチルコリン」があり、唐辛子などに含まれている「カプサイシン」や「酸」、物質では無いが「熱」も痛みの主な原因である。痛みはかゆみに比べて原因物質が多いと言える。「プロスタグランジン」は、痛み、かゆみに両方に作用する。さらに細かく見ていけば他にも両者に関わるものが多々ある。同じ物質でも、皮膚の表皮に限って投与すれば、かゆみになる。皮膚の深いところまでに作用させられれば、痛みになるなどといったことが起きる。とはいっても、原因物質のほとんどが異なっているので「かゆみと痛みではそれぞれ主な原因物質は異なる」と言える。

(3)「かゆみ」と「痛み」の脳活動

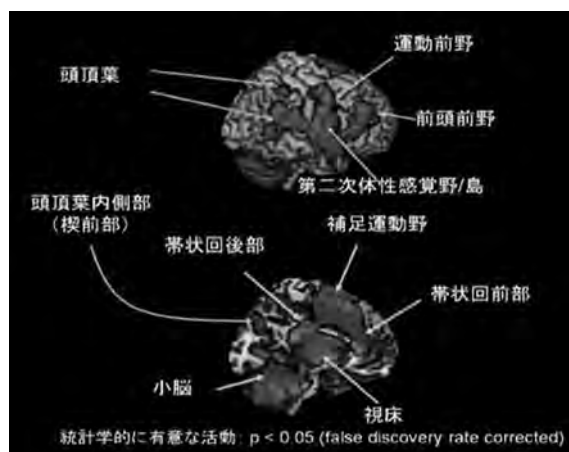
人間の神経は、運動系も感覚系も、脳内や脊髓で交差して作用する。例えば右手に触覚刺激を与えれば、その信号処理はほとんど左脳で行われる。けれどもかゆみでは身体のだこを刺激しても両側の脳が左右対称に活動することがわかっている。そしてかゆみは脳辺縁系と前頭葉が活動する。脳辺縁系は猫やネズミなどにある本能や情動に関係していると考えられている場所である。そして、前頭葉は脳辺縁系の本能的な行動を制御する機能、つまり理性が備わっている。かゆい時の耐え難いような不快感や自制の効かない掻きたいという衝動は脳辺縁系が持っている本能に関連するものだと考えられる。そして、それを抑えようとして前頭葉が活動するのだと考えられる。

また、かゆみには運動野と小脳にも活動が見られる。これらは、運動準備、体を動かそうとする前に活動する場所である。一見かゆみと関係がないように思える。しかし、定義にあるようにかゆみは「掻きたいという衝動を引き起こす不快な感覚」であるので、かゆみ刺激が与えられると「掻きたい」という衝動が起こり、脳が掻く準備を始める訳である。

痛みは、かゆみと同様に、痛み刺激に左脳と右脳が対照的に活動する。脳辺縁系の中の扁桃体(へんとうたい)という部分が活動する。扁桃体は、恐怖や強烈な不快感を感じる時に大きな活動を示す。しかし、かゆみ刺激では扁桃体は活動しない。

また脳辺縁系の主要部位である島回(とうかい)と帯状回(たいじょうかい)の中でも痛い時とかゆい時で活動する部位が異なっている。さらに、楔前部(せつぜんぶ)は、かゆみ刺激に対して活動することが多いが、痛み刺激で活動することは稀である。

つまり、かゆみを感じる部位は大きく見て同じだが、詳細に比べると違うということである。



出典:「生理学研究所」“機能的MRIで“痒み”の脳内反応”

また脳は、各感覚に優先順位をつけ、優先順位が高いものから処理することがわかっている。皮膚感覚の場合は、優先順位が1番高いのは関節位知覚(動いた関節が知覚として伝わる)次に触覚、振動覚。その次が痛覚や温度覚。かゆみは1番下位になる。そのため虫に刺された箇所には爪で跡をつけて「痛み」を与える、保冷剤などを当て「冷感」を与える行動は理にかなっている。また炎症がひどくない場合はかゆい箇所以外の所に保冷剤をおくとかゆみが引くこともわかっている。かゆみも痛みも、どちらも生体に対する侵襲を感知し脳に伝えるという目的は似ているが、似て非なる感覚である。「かゆみは痛みの非常に軽い感覚がである」という考えは誤りであることがわかった。しかし全くの無関係かということでも無く「かゆみと痛みは互いに密接に関わっている」ということがわかる。

では「痛がゆい」という感覚がなぜ存在しているのだろうか。これは単純に痛みとかゆみが同時に伝わっているだけである。痛みとかゆみの線維が同時に刺激され、脳が感知しているだけであり、別の種類のかゆみではない。かゆみ、くすぐったさ、痛みはどれも似て非なる感覚で独立した感覚と言える。

第3節 掻くことで起こること

前節では、かゆみの脳活動について整理した。この節では掻いた時に起こる脳活動、起こる現象などについて整理していく。かゆみは「掻きたいという衝動を引き起こす不快な感覚」と定義にあるように掻くという行動はかゆみとひとまとまりになっている。掻くという行動は、元来生命を脅かす伝染病を媒介する昆虫、毒、蚤、寄生虫、病原体などからの侵入物をかゆみとして感知し、掻くという行動を引き起こし、侵入物を排除する生体防御反応からできている。かゆい箇所を掻くという行動をとると人間は気持ちいいと感じる。そのことについて「生理学研究所」の柿木隆介先生のグループが「かゆいところをかくと快感が生じる。その時、脳内で何が起きているのか」についての研究を発表した。

実験は電気によるかゆみ刺激を、被験者の手首に与える。そして、2本の指に見立てて作った細長い銅製の道具で皮膚をかく。一方のグループはかゆみ刺激を与えられている手首をかく、被験者は気持ちがいいので「快楽条件」と命名された。本稿ではわかりやすくAグループとする。もう一方のグループである「対照実験」とい、Bグループはかゆみ刺激を与えられた手首から少し離れた前腕部をかく。2つの条件としてはかいている部位は異なっているが、「かゆみを感じてかくこと」なので両条件同じである。つまりAグループでの脳活動から、Bグループでの脳活動を引くことで残った脳活動を見てみるという実験である。すると明らかにAグループの時だけに「報酬系」や「快楽中枢」と呼ばれる部位である中脳や線状体に大きな活動があった。この場所はギャンブルに勝ったときや人に褒められたときなど物理的な快楽、心理的な快楽を感じる時に活動する。



出典:『世界に「かゆい」がなくなる日』

つまり「かゆいところをかく」ことは人間にとって快楽である。図に表すと上の通りである。

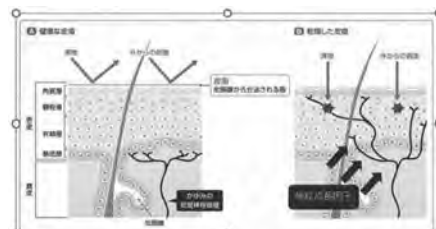
前述の通り「かゆいところをかく」というのは快楽である。このような快楽を脳が記憶すると掻くことに依存してしまい、掻くことをやめられなくなり、「無性にかゆくてもまらない状態」になる。それこそ、ギャンブル依存に似た状態になる。こういった病的な悪循環は「イッチ・スクラッチ・サイクル(itch-scratch-cycle)」という。イッチ(itch)は「かゆみ」、スクラッチ(scratch)は「掻く」といった意味である。様々な要因でかゆみが起きる、そこを強くかく、かいた部分が傷つく、傷ついた部分に炎症がおこる、症状が悪化する、もつとかゆくなる、さらに掻きこわす…といったようにかけばかくほどかゆくなるということである。具体的にいうと、皮膚が傷つくとなると「サイトカイン」という「インターロイキン1(IL-1)」や「腫瘍壊死因子- α (TNF- α)」といった傷ついた表皮の細胞を修復する化学伝達物質が出る。これらの物質はマスト細胞を刺激してヒスタミンを放出し、かゆみを誘発する。また、傷ついた皮膚は炎症を起こし、それがかゆみを引き起こす。そのために、また強くかいてしまいこの循環がずっと続くといったものである。

この「イッチ・スクラッチ・サイクル」はどこからでも起こり始めるが特に「ドライスキン」の状態によく起こる。ドライスキンは皮脂膜、角質細胞間物質、天然保湿因子などの減少に水分が不足し、細胞同士の

結びつきが弱くなって干からびた田んぼのような状態になっている。そのため、角層に隙間ができやすくなって、異物が侵入しやすくなり、それが刺激となってかゆみを引き起こす。

ドライスキンでは皮膚が必要以上に敏感になる。このことを明らかにするために順天堂大学皮膚科、環境医学研究所の高森教授のグループがかゆみと神経の関係について調べた。アトピー性皮膚炎などの患者を見ると、健康者に比べてはるかに多くのC線維が皮膚内に分布していることがわかった。また、真皮の中に留まっているはずのC線維が、枝分かれしながら伸び、表皮の角質層の直下までに達している事例も見つかったそうだ。

こうした現象が起こる理由、それは「セマフォリン3A」といわれるたんぱく質が関係する。健康な皮膚では神経が伸びるのを抑えるセマフォリン3A「神経反発因子」がNGF「神経伸長因子」よりも多く生産されるからである。一方、乾燥した皮膚やアトピー性皮膚炎患者の皮膚では、NGFの産生量がセマフォリン3Aよりも上回っているため、C線維が表皮まで伸びてかゆみを引き起こすということが明らかになった。



出典:「ファミクリWOCかわら版 7月号」

〔第3章〕 フィールドワーク

ここまで、様々な書籍を用いて調べ学習を進めてきたが、「かゆみ」についてさらに学びを深めるために、専門家の方に意見を伺うことにした。まず、「乾燥したらなぜかゆみを感じるのか、そのメカニズム」を明確にした高森健二さん、次に『アトピーはもう難病じゃない』『なぜ皮膚はかゆくなるのか』などの著者であり、菊池皮膚科医院を開設した菊池新さんにお手紙を書き、返事をいただくことができた。そして、論文を執筆する上で浮かんできた疑問や、かゆみの未来についてなどの3つの質問を投げかけた。3章はこの3つの質問に対する回答などをまとめていきたい。

【質問1】入浴中や入浴後に感じるかゆみのメカニズム

菊池新さんの回答:かゆみを引き起こすヒスタミンは血流が大きく関連する。入浴に限らずアルコールの摂取や辛い食べ物を食べたらかゆみを感じる原理と同じ。

高森健二さんの回答:皮膚にあるかゆみを感じる「TRPV」というレセプターがある。そのTRPVは温度も感じることができる。そのため入浴すると、レセプターが活性化されかゆみを感じる。

【質問2】かゆみ感覚の研究の進捗と今後

菊池新さんの回答:昔はかゆみの原因はヒスタミンだけだと考えられていた。けれども、かゆみを感じる原因はヒスタミン以外の化学伝達物質が多くあることがわかった。発見されている化学伝達物質中でも「インターロイキン31(IL31)」というものが注目されていて、この物質がかゆみをブロックする注射薬となり実用化されている。このように、これからもっと多くの原因物質が見つかり、使われていく。

高森健二さんの回答:かゆみと痛みは同じものとされてきたのでかゆみ単体の研究はあまり行われてこなかった。けれども別の知覚ということがわかりかゆみについての研究が進んでいった。そこでかゆみの原因物質がヒスタミンだけだと思われていたが、それ以外の化学物質が発見されてきた。そのため、「JAK阻害剤」という新しいかゆみをなくす薬が作られた。今後も新しい薬などが開発されていく。

【質問3】かゆみ感覚の必要性

菊池新さんの回答:もしかゆみを感じるができなかったら、痛みとは別の身体への侵襲に気づくことができない。アトピー性皮膚炎などに苦しんでいる人にとってはいらない感覚だろうが、それはなにかの危険を知らせているサインなので必要な感覚である。

高森健二さんの回答:かゆみは皮膚についたものだけで感じるわけではなく、内臓が悪くても感じる知覚

である。そのためかゆみがなければ「アラームリアクション」という警告反応を起こすことができない。それ故かゆみは必要だ。

今回のフィールドワークを通して、かゆみに対する見方が少し変わった。2人とも意見が大きく異なることはなく基本的に共通していた。それゆえにかゆみの必要性などがよくわかり、良い勉強の機会となった。一中学生からの突然の連絡にも関わらず丁寧に対応していただき大変ありがたかった。

〔終章〕 おわりに

私は今回の修了論文において「かゆみの必要性」というテーマのもと以下の疑問を持った。それは「『かゆみ』とは何なのか。なぜ『かゆみ』という感覚が人の体に備わっているのか。」という疑問をもった。この疑問に対して私は「かゆみはくすぐったさの延長線である」「皮膚についた古い角質や虫刺されなど人体に不要なものを体から取り除くためではないか」という仮説を立てた。

そしてまず、本を用いて検証した。その結果、かゆみとくすぐったさは別の知覚ということがわかった。また、かゆみのメカニズム、かゆみが生じた結果どうなるのかがわかった。

次にフィールドワークによって検証した。フィールドワークでは専門家の意見を賜りたいと考え「菊池新さん」「高森健二さん」に手紙書いた。入浴中や入浴後に感じるかゆみのメカニズム、かゆみ感覚の研究の進捗と今後、かゆみ感覚の必要性、といった質問を投げかけた。突然の手紙にもかかわらず丁寧に対応してくださりありがたかった。結果としては、入浴によって生じるかゆみもあるくらいなのだから、かゆみによる原因は1つではない。そのような原因になっている化学伝達物質は多く見つかり、これからも多く見つかっていく。よって、かゆみに悩まされている人を救える薬が作られていく。さらに、本論文のテーマである「かゆみの必要性」に対しては、かゆみは人体にとっても大切なものであり、身体の危険を示すものである。よって私の1つの仮説は正しかったと言える。

本論文を執筆するなかで、かゆみがどのような存在で人体にどのようなことを起こすのかについて知ることができた。その上で、かゆみは多くのことが解明されてきたがそれ以上に未知な部分が多い知覚であることがわかった。フィールドワークに協力していただいた方に「将来あなたのような人に皮膚科医になって欲しい」とおっしゃっていただき皮膚科医を目指している私としてはとても嬉しく感じた。このようにおっしゃっていただいた言葉を胸に私は夢へと向かって走っていく決意である。

参考文献

〔書籍〕

- ①新村出『広辞苑 第7版』(2018年 岩波書店)
- ②順天堂かゆみ研究センター
高森健二・富永光俊『肌トラブルを解決する かゆみをなくすための正しい知識』(2020年 毎日新聞出版)
- ③本田哲也『今と未来がわかる皮膚の科学』(2024年 ナツメ社)
- ④柿木隆介・高森健二『世界に「かゆい」がなくなる日』(2017年 ナツメ社)
- ⑤菊池新『なぜ皮膚はかゆくなるのか』(2014年 PHP研究所)
- ⑥山口 創『皮膚感覚の不思議 「皮膚」と「心」の身体心理学』(2006年 講談社)

〔インターネット〕

- ①「m3.com」(閲覧日2025年12月8日)
<https://ph-lab.m3.com/categories/clinical/series/featured/articles/452>
- ②「管理薬剤師.com」(閲覧日2025年12月8日)<https://kanri.nkdesk.com/hifuka/sinkei/sinkei16.php>
- ③「生理学研究所」(閲覧日2025年12月8日)https://www.nips.ac.jp/release/2009/09/post_29.html
- ④「ファミクリWOCかわら版 7月号」(閲覧日2025年12月)
[8https://www.twinheartmedical.com/blog/3917/](https://www.twinheartmedical.com/blog/3917/)

[佳作論文] 猫の高いところからの着地

3年C組 井上 結愛



[受賞の感想]

私はとにかく猫が大好きだからという理由でこの修了論文を執筆しました。自分で文章を考えて書くことが苦手な私は正直先輩方のようにすばらしい修了論文が書ける気がしませんでした。しかし、担当の先生やクラスの仲間と修了論文について話していると自然と楽しいと思うようになりました。この一年間でたくさん本を読んだり、先生とはまた違った大人の方にインタビューしたり…慣れないことだらけで迷惑もかけたかもしれませんが、とてもいい経験になりました。☑ 私はこの論文を書き進めるにつれて猫への愛がどんどん大きくなり、将来の夢も明確になりました。しかし、未来のことは当然誰にも分かりません。だからこそ未来の自分が「過去にこれをしていてよかった」と言えるようになってほしい。この論文も必ず将来に役立つと思うので無駄にしないようにがんばっていきます。担当してくれた先生、インタビューさせていただいた動物病院の院長さん、この論文に関わってくれた方々本当にありがとうございました。

目次

[序 章] はじめに

- 第1節 動機
- 第2節 疑問と仮説

[第1章] 基本知識

- 第1節 猫とは
- 第2節 猫の歴史と人間との関わり
- 第3節 猫と科学者

[第2章] 本を使った考察

- 第1節 身体の構造と神経系
- 第2節 物理用語
- 第3節 宇宙飛行士と猫の宙返り

[第3章] フィールドワーク

- 第1節 動物病院でのインタビュー
- 第2節 愛猫で検証・結果と感想

[終 章] おわりに

参考文献

[序 章] はじめに

第1節 動機

昔から猫は犬と並んでペットとして飼われることが多く、テレビ番組でもその可愛い姿が取り上げられることの多い人気の生き物である。そんな愛玩動物として知られる猫だが、以前動物の動画を紹介するテレビを見ているとものすごい高さのマンションから落ちてでも着地できている姿があった。また私の飼っている猫も寝ているときに1、2mほどの高さから落ちてでも着地することができていた。骨に関係するのか、筋肉に関係するのか、あの小さな身体の中にどんな仕組みがあるのか、とても興味が湧いた。そこで私は猫の高いところから着地する能力について知りたいと思い、修了論文のテーマとした。

第2節 疑問と仮説

この修了論文で私は「猫の高いところからの着地」というテーマのもと以下の疑問を持った。それは、「なぜ猫は高いところから落ちてでも着地できるのか」という疑問である。この疑問に対して「猫は他の動物よりもバランス能力が優れているからではないか」という仮説を立てた。猫は他の動物と比べて高いところや細いところもスイスイ進んでいる。その理由はバランス能力にあるのではないかと考えた。これから書籍・インターネットならびにフィールドワークを用いて明らかにしていきたい。

[第1章] 基本知識

第1節 猫とは

『ポプラディア』によると「猫」とはネコ目(食肉目)ネコ科に属する動物のうち、世界中で飼育しているイエネコの品種群の総称であり、またライオンやヒョウなどのネコ科の動物の総称として用いられることもある。野生のネコ科の動物は、オーストラリア、南極、マダガスカルを除いた世界中の大陸に分布し、砂漠から熱帯、森林にまで幅広い環境に住む。ライオン以外は、通常は群れをつくらずに単独で暮らす。多くは肉食で、鋭い牙と爪で他の動物を捕らえて食べるという。

第2節 猫の歴史と人間との関わり

前節において猫の定義とその生態についてが明らかになった。ではそんな猫はかつてどんな暮らしをして、いつ人間と出会ったのか。ここでは猫の歴史と人間との関わりについてまとめてみたい。

そもそもネコ科やイヌ科などの食肉目の動物は全て森林に住むミアキスという哺乳類の一群から進化した。ミアキスとは6000万年前に北アメリカ大陸とユーラシア大陸に生息。特徴として細長い胴体と短い足、長い尾を持っており、現代の猫と似ている点がいくつかある。ここで最古の猫を2種類紹介する。

①プロアイルス

ユーラシア大陸の化石から、およそ3000万年前に出現した。肉を切り裂くためにさらに特化した歯と出し入れできる爪を持っていた。

②プセウダエルス

プロアイルスの後の2000万年前に出現した。足指での歩行が進化し、森林だけではなく、開けたサバンナで狩りをしていた。

このことから猫は人が誕生するよりも前に誕生していたことが分かる。

では、どのようにして人と出会ったのだろうか。



それは、1万年ほど前にお互いの都合の良い取り決めから始まった。1万年前の人間は穀物を保存するために穀物貯蔵庫を建設しており、そのため必然的に引きつけられるネズミの量が増えてきた。すると今度はそのネズミにもともと生息していたヤマネコが引き寄せられた。そうして、人間とヤマネコとのあいだに、互いに都合の良い関係が生まれ、人は猫に出会ったという。(参照:猫の博物図鑑)

『ポプラディア』によると、現在の猫はペットとして世界中で人気があり、さまざま交配と改良が行われている。その品種は大きく短毛種と長毛種の2つに分けられ、短毛種は数が多い。現在では猫だけでも100品種以上が知られ、さらに数は増えている。キャットショーなどの品評会も世界中で行われている。

第3節 猫と科学者

ここで猫の着地の謎について取り組んだ科学者たちを簡単に紹介していく。

- (1) エティエンヌ=ジュール・マレ…連続瞬間写真の技法を発展させ、その後落ちた猫の写真60枚を研究機関へ提出し、猫の落下中の運動を明らかにした。これは今後の研究に大きく貢献することとなる。

【マレが撮影した猫の写真】



- (2) エミール・ギュエ…フランス人数学者。どのようにして猫は着地するのかを解明した。

その際の図は「タック・アンド・ターン・モデル」と呼ばれている。

- (3) マラーとウィード…神経科学の観点から猫の立ち直り反射に対する初の研究を行い、その後どのように宙返りをすれば猫は正しく着地できるのか、どの感覚を使って判断しているのかを調べた。

〔第2章〕本を使った考察

第1節 身体の構造と神経系

前章において猫の生態と科学者について明らかになった。ではそんな猫の身体はなぜ柔らかいのか、どうやってバランスをとっているのかをまとめてみたい。猫の身体はとても柔軟性があり、狭い隙間に身体を押し込むところもよく見かける。そんな柔軟性を持っている猫だが、その秘密は猫の脊柱(背骨の柱状の骨)と複雑に配置された結合組織(身体を支える組織)にある。ここで脊柱について説明する。

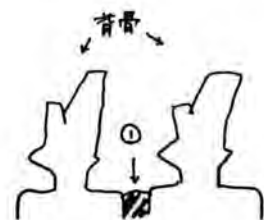
- ①椎間板…脊骨を構成する椎骨のあいだにあるこの骨が猫の動きをしなやかにしている。

- ②骨格筋…走る・歩く・ジャンプするなどの負荷がかかる

運動で使われる。獲物を追うときに瞬発的に猛スピードになる。

猫はこのような骨や筋肉があるため身体がとても柔らかいことがわかった。

次になぜ猫は高いところから落ちても足から着地できるバランス感覚を持っているのかを説明する。



1章3節にて紹介した通り、マラーとウィードが猫の神経系について特定しようとした。まず2人は大脳を切除した猫が立ち直り反射を一切示さないことが発覚し、どの感覚を使って判断しているのかを調べる研究に取りかかった。そして、その立ち直り反射は猫の耳にあることが発覚した。

その際に2人が調べた耳の構造について説明する。

- ①前庭系…主に内耳の中に取められ、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚に続く第6の感覚とみなされる。
- ②半規管…前庭系の中にあり、回転運動としての加速を感知する。感知するものとして、前後方向の傾き・背骨を軸とした回転・左右方向の傾きの3方向の回転運動を感知。
- ③耳石器…半規管と同様前庭系の中にある。耳石器はさらに2つに分かれ、卵形嚢と球形嚢がある。卵形嚢は水平に設置され、前後左右の加速を感知。一方、球形嚢は垂直に設置され、上下の加速を感知する。



【猫の耳の構造の図】

2人は猫の立ち直り反射での前庭系と視覚系の役割を明らかにしたいと考えた。そこで猫に目隠しをしたまま高いところから落としたり、前庭系を損傷したまま落としたりする実験を行ったが、両者とも猫は正しく着地した。しかし、前庭系を損傷した上目隠しをされていた場合は宙返りするための行動をしようとしなかった。この実験から立ち直り反射では目と前庭系のどちらかを使って着地するための正しい姿勢・バランスを判断することがわかった。

第2節 物理用語

1章3節で紹介したエティエンヌ＝ジュール・マレが研究機関に猫の宙返りのコマ写真提出した際に「これは物理法則に反する!」という意見が多かった。ではどのような物理法則に反しているのだろうか。それは「角運動量保存則」である。これは一体何なのか、他の物理用語も合わせて説明しておく。

- ①角運動量保存則…物体がどれくらいの勢いで回転しているのかを表す用語は「角運動量」といい、外部から別の力がない限り角運動量は一定に保たれる。角運動量保存則という。
例)静止しているおはじきに別のおはじきを衝突させると、衝突したおはじきと同じ速さで動く。
- ②運動量……………物体がどれくらいの勢いで運動しているかを表す用語。角運動量と同様に保存され「運動量保存則」と呼ばれる。速度が正しく質量の大きい方が運動量が大きい。例)速度が同じ車とトラックがぶつかった際、車はトラックよりも質量が小さいため潰される。
- ③慣性モーメント…質量とその広がり方によって回転がどれくらい妨げられるかの程度を表す用語。質量が同じで大きさの違う複数の車輪があったとすると、直径が大きく、質量が回転軸よりも遠いところに広がっている車輪ほど慣性モーメントが大きい。
例)フィギュアスケート選手が回転する際、腕を閉じると身体を中心に質量が集まり回転が速くなる。

「角運動量保存則」は本論文で一番重要となる用語である。角運動量保存則という言葉を使って最初に説明した科学者たちの疑問を表現すると「猫は落としている人の手を蹴っているわけでもないのになぜ一匹で回転できるのだろうか。これは角運動量保存則に反している!」となる。確かに角運動量保存則の説明で「外部からの別の力がない限り角運動量は一定に保たれる」と書いたが、猫はどのようなテクニックを利用して宙返りをしているのかが問題となる。実はそのテクニックは宇宙飛行士も使用している回転するためのテクニックで表せるという。では、それは何か、次節で詳しくまとめていく。

第3節 宇宙飛行士と猫の宙返り

前章で「猫の宙返りテクニックは宇宙飛行士が使用する回転するためのテクニックで表せる」と書いたが、実は当時、宇宙で身体の向きを変えるのはとても難しいことだった。なぜなら、宇宙は空気がなく角運動量がゼロの状態のため空中に浮かんでいるためだ。今までは猫の宙返りの生理学的なものについて説明してきたが、そのメカニズムについて説明していく。

まず、最初に宇宙飛行士が回転するために考えられたのが空気圧を用いる「推進ユニット」という機械である。圧縮空気を詰めたタンクを背負い、噴射口を好きな方向に向けて推進力を得るという装置だ。そ

れに加えて、ジャイロスコープという回転した車輪を持ち、自転車が倒れないのと同じように宇宙飛行士の身体の向きを安全に保った。つまり、宇宙飛行士がこけてしまい身体がグルグル回転してしまわないように角運動量保存則を味方につけたのだ。

しかし、宇宙飛行士は特別な機械を持っていない時でも身体の動きを制御できなければならない。そして、1960年代初めにデイトン大学の研究者がライト＝パターソン空軍基地の科学者と手を組み、宇宙飛行士が身体の働きだけで向きを変えるための方法を考え出した。そのたくさんある名前の中に「猫の反射」「ベンド・アンド・ツイスト」という言葉がある。今回はこの2つを説明していく。

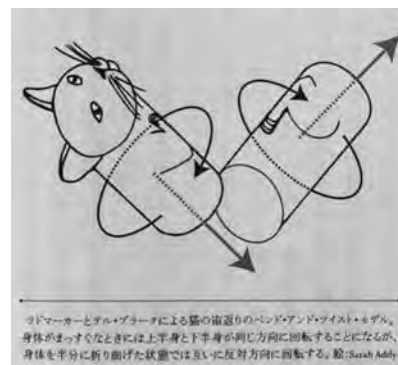
①猫の反射…「タック・アンド・ターン」という回転方法を使用した回転。上半身と下半身の慣性モーメントを交互に変化することで身体の質量を変化し、回転が起こる。

②ベンド・アンド・ツイスト…1930年代にラドマーカとテル・ブランクが観察した猫の神経科学を観点とした宙返りテクニックを人間に当てはめたもの。上半身と半身を回転することで身体全体の向きを変える。

また、『面白くてよくわかる！猫の心理学』より説明すると、高所から落下→背中を回転→骨盤を回転→足を突き出す→着地、といった順序で着地する。しかも猫の着地をサポートしているのは「猫背」でもあり、猫の身体は二章一節の序盤でも説明した通り非常に柔らかく、着地する際に丸まって衝撃をクッションのように吸収するそう。猫の身体の柔らかさはこんなときにも利用されている。

つまり、猫の宙返りの最も重要なメカニズムとしてベンド・アンド・ツイストがあげられることとなる。猫はベンド・アンド・ツイストの方法に加えて、後ろ足を伸ばして前足を引っ込めると素早く正しい向きに回転することができる。尾を逆方向に回すと、上半身の回転スピードがあがる。猫はこの方法を上手に使いこなしながら宙返りを成功させているのだ。

(参照:『「猫ひねり問題」を超一流の科学者たちが全力で考えてみた』)



【ベンド・アンド・ツイストの図】

〔第3章〕 フィールドワーク

ここまで書籍を使用し調べ学習をしてきたが、「猫の宙返り」についてさらに学びを深めるために、私がいつもお世話になっている動物病院の院長さんからお話を聞かせていただくことができた。また、安全面に気を使い、私が飼っている猫に実際に宙返りしてもらい、今までの結果と比較してみた。

第1節 動物病院でのインタビュー

〔質問1〕品種や年齢によって着地の成功率は上がるのか？

→関節などの骨の病気をもっている猫は成功率が低く、それに加えて子猫や老猫も成功率が低い。

老猫は関節が硬いのが理由だそう。また、スコティッシュ・フォールドという猫種は生まれつき足が短いため、成功率が他の猫よりも低い傾向がある。

〔質問2〕高いところから落ちたとき以外にも宙返り能力を使う時はあるのか？

→猫は手脚を曲げて宙返りするため手足を伸ばしたまま宙返りをするのではない。だが何か獲物を獲っているときやおもちゃで遊んでいるときはよく見せる。猫の宙返りは人間の水泳にも使われている。

第2節 愛猫で検証・結果と感想

続いては私の飼っている猫に宙返りしてもらった。もちろん下にカーペットを敷いて、無理やりではなく遊んでいるときにしてもらい、安全面には気を配って実践した。スマホのスローカメラで動画を撮り、3

節ではそのスローカメラで撮った飼い猫の宙返りと2章で調べた宙返りを比べてみる。

〈二章で調べた宙返り〉

- ①高いところから落下
- ②上半身を回転
- ③下半身を回転
- ④足を突き出す
- ⑤着地(背中を丸めて衝撃を吸収)



〈飼い猫がした宙返り〉

- ①遊んでいるときに宙にひっくりかえる
(背中が下の状態)
- ②上半身を左回りに回転
- ③下半身を同じく左回りに回転
- ④足を突き出す
- ⑤着地(背中を丸めて衝撃を吸収)

〔結果と感想〕

○動物病院でのインタビューでは、猫の宙返りについての資料が少ないのに今までにあった経験でお話してくださってとてもわかりやすかった。猫の宙返りは猫の病気関連の動物病院では専門ではないのに対して中学3年生相手の私にたくさんのことを説明してくださり、嬉しかった。

○〈飼い猫がした宙返り〉の④の「足を突き出す」は私が思っていたほど足をピンと伸ばしていなかったが体勢を崩すことなく着地。2章で調べた内容と同様着地の際に背中を丸めて衝撃を吸収していた。

つまり、この〈二章で調べた宙返り〉と〈飼い猫がした宙返り〉の2つを比べたところ、私が思っていたのとは違うところもあったが、ほぼリンクしていた。

〔終章〕 おわりに

今回私は「なぜ猫は高いところから落ちてでも着地できるのか」という疑問から出発した。最初は他の動物よりもバランス能力が高いからだと考えていた。結果として私の仮説はあっていたが、本やフィールドワークを用いる中で耳の中にある前庭系のバランス能力を使用していたり、落ちる時に物理を使いこなしながら姿勢を整えて着地していたりするとわかり、猫は私の仮説よりもすごいことをしていた。また、この修了論文を書いているうちに「猫の着地は時代が進むにつれて進化してきたのか、それとも、もともとその能力があるのか」や「猫以外にも高いところから落ちてでも着地できる動物がいるのか」などたくさんの疑問が生まれてきた。もっと猫のことを知りたいと思い、猫への関心が深まった。

現在は猫の研究者は少ないが、これから猫について色々な研究がされるかもしれない。そして、その研究の中で宙返りの研究が進んだら人にも適応させることができるかもしれない。ただ、研究のためにたくさんの命を犠牲にしたり怪我をさせたりするということが起きるかもしれない。猫の研究をするなら人よりも猫第一で研究することが大切だと思う。また、猫は年齢に限らず100%着地に成功するわけではないのでわざと落とすのはやめてほしい。

参考文献

〔書籍〕

- ①『ポプラディア』
- ②サラ・ブラウン『猫の博物図鑑』(原書房 2020年)
- ③グレゴリー・J・グバー他『「猫ひねり問題」を超一流の科学者たちが全力で考えてみた』(ダイヤモンド社2022年)
- ④今泉忠明『面白くてよくわかる!猫の心理学』(アスペクト 2014年)

〔最優秀プレゼンテーション〕

学歴社会の真相

3年D組 藤井 新太



〔受賞コメント〕

この度は素晴らしい賞をありがとうございました。この賞は修了論文の指導担当の先生、プレゼンの指導をしてくださった先生、フィールドワーク先でお世話になった方々、プレゼン資料の作成やプレゼン時のサポートをしてくれてクラスメイトがいないと頂けなかったものです。論文は執筆していくうちに、次第にやる気も上がったし楽しくなっていました。自分の興味のあることと本気で向き合ったからこそその結果です。自分の進路について深く考えることもできました。僕は「学歴」と「人間性」どちらも兼ね備え、社会に貢献できる人間になりたい、そして、人への感謝を忘れずに生きていきたい、今そう強く思っています。

〔プレゼン原稿(一部抜粋)〕

3年D組の藤井新太です。突然ですが、質問です。「人生で1番大事なもの」って何ですか。

麻生君、どうですか——はい、それはお金です！

田中君、どうですか——(ロマンチックに)はい、それは愛です！

確かに、お金も愛も大事ですね。でも僕の論文のテーマは、もしかするとそれ以上に大事なものかもしれません。僕のテーマ、それは「学歴」です！

どうして先生たちは中学生の僕たちに「大学」「大学」「大学」って言うのでしょうか。だって、皆さん、僕たちは3年前までランドセルですよ。でも、大学受験というのは、僕たちの人生を決めちゃう重大案件みたいです。

小学校よりも中学校よりも高校よりも、どの大学を出たかは一生ついてくるイメージがありませんか。だって、クイズ番組を見れば、出身大学別チームですよ。つい先週、選挙がありましたけど、政治家たちのプロフィールにも出身大学だし、それから…去年はこのニュースが話題になりましたよね、そう…「学歴詐称」!!



僕は、今回の修了論文で「なぜ日本の企業は高学歴の人を求める傾向にあるのか」という疑問に対し「企業のトップがそもそも高学歴なのでその連鎖が続いているからではないか」という仮説を立てて検証したのですが、要するに、学歴社会の真相を明らかにしたい、これが僕の論文の根幹です。
(中略)

…ここまで調べてきて僕は改めて気づかされたことがあります。それは「学歴社会は確かに存在する」という

ことと「そうは言っても人間力が大事」という矛盾した2つの条件が「はっきり存在する」ことです。

みなさん、この本を知っていますか。昨年から売れに売れている話題の1冊。作者は偏差値37から一浪して早稲田に入った経歴を持っているの受験系youtuberですが、この本の中でこう断言します。

残念ながら「大人になったら学歴なんか関係ない」なんてことは絶対にありません。

この社会の根底にある重大な事実を、大人は教えてくれません。「自分らしさ」は確かに大事です。でも…

今、僕たちは大きな船に乗っています。周りの人たちに助けをもらいながらこの船をどうやって漕げばいいのか、天気や風をどう読めばいいのか、そんなことを学んでいる段階です。でもいずれ社会という大海原に1人で漕ぎ出さなければならない日がやってきます。その時に自分の船に乗せることができるのが、自分の学んできたこと(これが学んだ歴史、つまり学歴)、そして僕という人間そのものの力なのだと思います。この2つをバランスよく備えてこそ僕たちの船は前に進むのです。



さあ、僕たち3年生は高校という次のステージの海に出発します。

2年生の皆さん、これから取り組む修了論文をぜひ大きな成長のきっかけにして、僕たちに続けてください。これで発表を終わります。ありがとうございました。(船に乗って去る)

[フィールドワーク賞]

オニバスが絶滅危惧種に指定された要因とは



3年B組 嶋浦 万桜

私は環境科学研究部でスイゲンゼニタナゴとオニバスの保護活動に取り組んでいます。今回修了論文執筆にあたり、福山市でオニバスが生育している池へ足を運び、水温、水深、水質調査等のフィールドワークを行いました。池の水質を調査するために水を汲んでいる際、誤って望遠鏡を落としてしまうなどのハプニングはありましたが、仲間と楽しく研究することができました。調査を通して、自分の目で見て調べることの大切さを強く感じました。本やインターネットで分からないことは実際に人の話を聞き、調査を重ねることで徐々に明らかになるのだと実感します。今回の研究で得た学びを今後のオニバスの保護活動に繋げていきたいと思っています。

好まれぬ食の可能性



3年B組 橋本 亜蘭

「日本人が再び昆虫を食材とする日は来るのか」という疑問を解決するために昆虫食を食べないという選択肢はありませんでした。昆虫はどんな味・食感なのか、どのように調理するのが美味しいのかを知る絶好の機会でした。かつて日本の内85%の都道府県で食べられ、最も知名度の高い昆虫食という歴史を持つハチを選びました。いざ食べるとなると抵抗は大きいものでしたが、一口食べた後から僕の脳はハチは食材と認識するようになり、箸が止まることはありませんでした。これまでの自分の偏見や常識が大きく覆った瞬間でした。僕の論文に協力してくれた全ての方に感謝します。

バナナの腐敗と熟成のメカニズム



3年D組 大下 直輝

今回僕が最も力を入れたフィールドワークは、バナナの腐敗と熟成がどの条件でどのように行われるのかという実験です。いくつも条件を用意して特定の時間に温度を測りました。撮った写真の比較や観察を行って分かったことがたくさんあり、結果を考察する過程が楽しかったです。実験は18日程度かかって大変だったけれど好きなものを探究できて楽しかったですし、研究、観察をすることで観察力、分析力が身につき、粘り強さも鍛えられました。今回賞を頂けて達成感で胸がいっぱいです。協力してくださった論文担当の先生に感謝します。高校生になってもこの修了論文で培った力を活かしてもっと好きなものを探究していきたいです。

特別校長賞 「徒然なるままに過ごしてみる」

3年C組 仁科 祐瑠



池澤夏樹個人編集 日本文学全集7
『徒然草』(内田樹 訳)
(河出書房新社)

「あなたさまが毎朝召しあがっている大根でございます」
「友になるべき人に三つある。一つは物をくれる人」
——私の中の徒然草のイメージと違いすぎて、途中で読むのをやめそうになりました。

今年度は修了論文の関係で古典を読む機会が格段に増えました。古典への興味が湧いていたので、教科書にも載っている「徒然草」を読んでみることにしました。授業では鎌倉時代末期に成立した随筆集と習っていたので、さぞかし真面目で教訓じみたものなのだろうと思っていました。そう途中までは。

徒然草は段に分けられていて、長くても一・二ページ、短い段は一行のものもあります。序段は「徒然なるままに、日暮」から始まる有名なもの。どんなことが書かれているだろう！ とワクワクしながら読み進めました。しかしここで

私の中の堅苦しい徒然草の印象は崩れることになります。「良い男とは何か」や「若い女の手足がまぶしい」など想像していたものより幾分くだらないことが書かれていたからです。まるで現代の私たちが書く日記のようで、時には自分自身に問いかける場面があったり、身の回りで起きた面白いことを書いた、世の中への愚痴をこぼすこともあります。その中でも私のお気に入り、第六八段の毎日大根を食べていたらある日大根がやって来て敵から守ってくれたという男の話。そして第二七段の、物をくれる人と医者を知恵のある人とは友達になるべきだという現実的すぎる教えの話です。他の古典作品であれば同じ出来事でももう少し堅苦しく書くでしょう。徒然草は起きたことと思つたことをそのまま文章にするから親しみやすい。これが現代まで読み継がれる理由ではないでしょうか。人の問拔けさや不安定さをそのまま受け入れてくれる寛容性がこの作品の魅力だと感じました。鎌倉時代も現代も、人は時に無駄な時間を過ごすことがあるのは変わらない事実です。でも徒然草には、それもいいね、そんなものだよと認めてくれるような温かい雰囲気を感じます。

現代社会では効率や生産性が重視され、無駄を避けよう、取り除こうとする傾向こそが美德とされることが多々あります。しかし徒然草は「無駄な時間こそ本当に大切なものだったりする」と教えてくれます。無駄な時間の中にふとした気づきや幸せがあつた経験がある人も多いのではないのでしょうか。まさに今に繋がる教訓だと思えます。兼好法師の書く「無常」の世界は、全てを悲観的に捉えるのではなく、むしろ足元にある小さな幸せの存在を明るく樂觀的に教えてくれるのです。

訳者である内田樹氏も「私は七百年の歳月を隔てて、兼好法師の隣にいる自分を感じる」と述べています。兼好法師の書いた徒然草の教えに準えて、私たちも徒然なるままに、流れに身を委ねてみるのもいいものなのかもしれません。

校長賞 「他者へつなぐ」

3年D組 中塚 二花



川上徹也『あの日、小林書店で。』
(PHP文庫)

「小林書店」――皆さんは知っているでしょうか。本屋を営んだ経験が一度でもある人なら、知らない者はいないとまで言われる伝説の本屋。悔しいことに、私が小林書店ひいてはその店主である小林由美子さんのことを知ったのは、先日行われた「ホンモノ講座」でのことでした。

様々な分野で活躍する講師の方々をお呼びして、お話を聞かせて頂くこの企画は、これまで医者や弁護士、大学教授などの勉強における著名人を呼ばせて頂くことがほとんどで、小林由美子さんのような市井の方をお呼びするのは、初の試みと言っても過言ではなかったそうです。優しい笑顔と、檀上からこちらを見つめてちゃんと伸びた背筋。私は一目で小林さんのことが好きになりました。

私たちが小林さんのお話を聞かせて頂いた時には、もう残念なことに小林

書店は閉店してしまっていました。しかし、大勢の人が小林書店へ向ける思いが消えた訳ではありません。『あの日、小林書店で。』これは小林さんが来られる際に紹介された本です。「伝説の書店をモデルにした、感動のノンフィクション&ノベル!」とうたわれたその本は、「ノンフィクションとノベル(フィクション)が共存できるわけがない」という私の思い込みを見事に打ち壊してくれました。なんとなくという理由で社会人となってしまう大森理香の苦悩と、そこに時折入る小林さんの人生経験が合わさって、飽きのこない本当に面白い小説でした。

この本の中で私が特に印象深いと感じたのは、二人の会話の中で小林さんが小林書店について語った時の「小さいし不便な場所やし、待っていてもお客さんは来てくれへん。そやからこつちから出向いていく。そやから達成できたんや。弱みと思っていることが一番の強みになるってことや」という言葉です。

「弱みが強み」で思い出したことがあります。今、私はミュージカルをしているのですが、他の生徒たちよりも体格が良いのでどんな衣装を着ても少し大柄に見えてしまいます。しかし、それが幸いしたのか力持ちの役に選ばれることができました。これも、弱みが強みになった瞬間の一つではないでしょうか。ミュージカルに必要とされる技巧はとても多いです。それ以上に私ができていない所は多い。そんな弱みを全て強みに変えられたらどうでしょうか。きっと自分が作った「自分だけの強み」は一生のものとなるでしょう。そうやってできた強みを大切にするのできる人生にしたいものです。

ホンモノ講座の最後に、小林さんがお客さんの一人から言われた言葉について話してくださいました。「小林書店は本屋でなくなっても永遠に不滅や」――私は、人を愛する人は最後に必ず人に愛される人二なれると信じています。この物語の主人公の大森理香のように。

あなたもそうなりますように!

校長賞 「打倒！やり過ぎの自分」

3年D組 藤城 拓真



アンデシュ・ハンセン
『最強脳』
(新潮社)

僕はゲームが好きだ。ものすごく好きだ。毎日のようにゲーム機に手を伸ばしては時間を忘れるほど夢中になってしまっている。するともちろん「ちよつとあんたやりすぎよ!!」いい加減にしなさい!!という母の怒号が飛ぶ。ああ一体これを何回聞いたことか。今日もまたいつものようにゲーム地獄に陥っていた僕のもとに、案の定またお叱りが飛んで来て頭の中でため息をついていたのだが、その日はちよつと様子が違う。聞こえてきたのは「いい加減にしなさい!!」ではなく、「この本を読みなさい!!」だった。半信半疑で手にした本。それがこの『最強脳』という本だ。

最強脳っていったい何だ? と帯を見ると、どうやらこの本には「脳を強くする」方法が書かれており、教育大国スウェーデンの小中学生がバイブルになっている本だという。ページをめくると、スマホ・ゲームのやりすぎをどう改善す

るかという内容も書かれているではないか。そこで一番大切だと書かれていたのが「運動」だというから驚きだ。運動をおこなうことでドーパミンを出し、それがスマホを見ることで得られるドーパミンを抑え、やりすぎを改善するという理論だった。これはなかなかいい案だ。

思い返してみるとこれまでゲームの沼から抜け出すために時間を決めたり、そもそもやらないように意識するなどといういろいろ試してみたが、いずれも効果を得られることは少なかった。しかし「運動」ならできるかもしれない。僕は運動が好きだし、これでスマホを抑えられるなら一石二鳥でやらない手はないと思った。そこで今までもずっと帰宅部だった僕は一念発起、テニス部に入り夏休みもしっかり部活に行き汗を流した。するとどうだろう。今までもずっとためこんで終わることのなかった夏課題もコツコツ取り組むことができ、め得太くゴールテープを切ることができたのだ。更にあれだけのめり込み、ゲーム三昧だった毎日の生活が少しずつ自己管理できるようになり、親にも「よくなったんじゃないか」と褒められるまでになった。まさに別人格である。また前から思っていた体育の後の脳のスッキリ感は何だったんだろうという疑問も、この本を読んで納得した。この『最強脳』という本を教えてくれた親には感謝しかない。

この本を読んで、僕はゲームと上手に向き合うことができるようになってきたし、これからもつと上手に使えるようにしたいと思うようになった。そのためにも体を動かすことを大切にすると心に誓った。この本は中学生の僕らにはピッタリの本だと思う。勉強が苦手な人、集中できないと悩んでいる人も、この本を読むことで何かヒントを見つけられることができるはずだ。『最強脳』は脳を強くさせ、自分の可能性を広げてくれるすばらしい本だった。脳を最強に鍛え上げることで僕自身も自分史上最強になれると確信できた、笑いの止まらない夏だった。

校長賞 「真実とは」

3年D組 森藤 咲葵



福田ますみ
『でっちあべ 福岡「殺人事件」事件の真相』
(新潮文庫)

きっかけは修了論文の指導担当である校長先生のひとことだった。将来法律を学びたいと言った私に先生は、「冤罪」というキーワードを示されたのだ。逮捕から五十八年を経て「死刑囚」の立場から解放された袴田巖さんのニュースも私が冤罪に興味を抱いた理由の一つだ。その週末に本屋で見かけたポップの「冤罪」の言葉を見た時、この本を思わず手に取ったのは言うまでもない。

主人公の小学校教諭が受け持つ男児の母親とトラブルになるところから悲劇は始まる。母親に自分の息子が暴力を受けていると「でっちあべ」られた主人公が小学校から追いやられ、世間からも罵倒されたノンフィクションだ。この本のテーマの一つは、「ねつ造」に関する人間の心理や社会構造。これは現代社会のメディアの影響や個人と社会との関係を深く表しているだろう。ま

た、日常の中で起きる小さな嘘や誤解がどれだけ大きな波紋を広げ、その影響がいかに人の人生を変えるのかも描かれている。私はマスメディアの影響力の強さに改めて恐怖を感じた。

「冤罪」に興味を持った私は「袴田事件」や「大河原化工機事件」について調べていく中で、それが人の人生を一瞬にして崩壊させる恐ろしいものだという印象を受けた。無実の人が犯罪者として扱われ、社会からの信頼を損なってしまう。著者の福田ますみさんは「取材を進めるに従い、これは教師のいじめではなく、教師へのいじめではないかとの疑いを強くした」と記している。日本国民は一度被告とされた人へのバッシングがあまりにも強すぎるのではないだろうか。「ゆがんだ正義」を振りかざしているとも思える大衆行動に私は大きな疑問を感じた。

私が将来目指している検察官という職業は、冤罪が生まれてしまう過程の中で大いに関わりを持つ職業だ。嘘を見抜けるようになるのは難しいが、根拠のない物事をすぐに信じないことも大切な持つべき姿勢だ。インターネットが発達し、誰でも世界中に情報が発信できるようになった世の中にはたくさんの「デマ」が存在している。例えば参院選ではSNSで誤情報が多く出回った。特に「中国人留学生に返済義務なしの奨学金を渡している」といった外国人に関するデマが多く見られた。

この夏、ある高校の野球部の暴力問題が話題になっている。もちろん暴力はよくないが、生徒の顔、実名とされる情報をインターネットに投稿するのは行き過ぎた行為なのではないだろうか。インターネットを手にしたこと、間接的な攻撃が日常的になってしまったと感じる。インターネットとの向き合い方をもう一度考え直していくべきだと切実に思う。様々な情報が溢れているこの社会で何が本当なのかを見失ってしまつてはいないだろうか。物事を冷静に判断し、正しいまなざしを身につけたい。

EISHIN GAKUEN

Since 1904

建学の精神『実学の体得』

いかなる時代であっても
社会に貢献する人となるために

www.eishin.ed.jp

編集・発行： 学校法人 盈進学園 盈進中学高等学校
720-8504 広島県福山市千田町千田487-4
TEL:084-955-2333 FAX:084-955-4423

発行日： 2026年6月

本紙に掲載された内容の無断転載を禁ず